

『そのまゝ病氣にでもなつてはたまらないといふやうな氣がするからね』

『あなた随分御幣かつぎね……？』

『自分でもさう思ふんだけどね……』島田は笑つた。

お銀はその時、その十年前に、そこにかけてあつた友禪メリンスの四布蒲團をはつきりと再び眼の前に見たやうな氣がした。その時かの女はいやな氣がしたことを思ひ起した。——あなたは随分ね——かう言つてあとを言はずにじつと島田の顔を見詰めたことを思ひ起した。

その時島田は『それはお前の空想だよ』と言つた。そしてかれは、『そこには他の女はゐない……。お前より他は誰もそこまで入つて來ないよ』と言つた。『うまいことを言ふわね。あなたも此ごろ隅には置けなくなつたのね』かうかの女は言つて笑つたことを思ひ起した。

（私なら、もつと綺麗にして上げるのだけど……）さすがにさうはつきりとは言

はなかつたけれども、それに近いことをかの女は何遍か言つた。一度來ただけで別に詳しく知つてゐるわけでも何でもなかつたけれども、それでもかの女はよくその書齋の一室を話の材料にした。『あそこは静かで好いでせう……。』とか、『あの裏の中庭になつてゐるところは好うござんすね』とか、『さうですか、午後からは西日がさしますか……。でも、あの梧桐かきがもう大きくなつたでせうから、日よけになるでせう』などと言つた。志摩子がまだ三つか四つの頃、其廊下を遠慮なくづかづか入つて行つたことなどをかの女はそこに持出した。

四九

その一室の中にかれの半生涯が過ぎて行つたと同じやうに、かれとかの女との戀愛の生活もそこに種々な痕跡を留めてゐるのだつた。反古籠はこりの底からは埃塵にまみれたかの女の手紙が何通も何通も出て來た。奥の料理屋のつけの綴つたのも

出て来た。新聞に半段ほど書かれた切抜きも出て来た。さうかと思ふとその肥つた遊び人とかの女の艶聞の書かれてあるものなども出て来た。そしてさういふものは一つとしてかれにその昔をはつきりと再現して見せないものはなかつた。或は大宮の朝の草の露。或は池上の高い臺地に憇つた旅舎の夕の霧。或は大きな河に添つた二階屋の間。それは手紙にはさうしたことは書いてなくつてもその日附がかれにはさうしたその時々の光景をはつきりと展げて見せた。そしてその間には世間にも、かれの交遊の間にも、また文壇にも絶えずいろいろなことが起つたり消えたりしたのである。またさまざまのことが展開されて行つたのである。塞がつて何うしても出ることの出来なかつたものも、いつか自分の思つたやうなところへと出て行つてゐたのである。また一時その権力があらゆるものを壓迫して、それがあつた中にもその翼を伸すことが出来なかつたものが、いつとなしにその権力が減退して行つたために、今度はその壓迫されたものが却つて他を壓

迫するやうな形になつてゐたのである。さういふものゝ中にこのかれの一室のあつたことは面白い。またその手紙やつけが残されてあることは面白い。そしてさうしたものゝ上にもまた絶えず月日が刻まれて行つてゐるといふことは、更に一層の不可思議をかれの心に誘はずにはゐなかつた。

島田は曾て一つの小説を書いたことを思ひ起した。それは他でもない、この一室の内の籐椅子にかけた友禪モスリンの蒲團をサンボリカルに書いたものだった。今でも覚えてゐるものがあるだらうと思ふが、そこには妻の形をした一つの姿があらはれて、その蒲團の中に誰かがゐると言つて、それを指摘するところからその筆を起されてあつた。『誰れもゐやしない』かう主人公の形をした姿はそこから立上つた。『そら、そこにゐるではありませんか！ そら！』かう言つて妻の形をした姿は息巻くやうにその傍に行つた。

それは單なる空想だつたらうか。實際その蒲團の中に女の姿はゐはしなかつた

らうか。妻の形をした姿はいきなりその蒲團を取りにかゝつた。

『この蒲團があるから、あなたはその女から離れることが出来ないのです。この蒲團の中にその女がゐます。そら、その模様の中にも、縫目の中にも、肩當のところにもその女がゐます……。それを此方におよこしなさい……』

『そんなものはゐない……』

『いゝえゐます、たしかにゐます……。その證據にはあなたはかくしてゐるではありませんか……』

と、主人公の形をしたひとつの姿は、猶ほそれを押へるやうにしたが、やがて思ひ切つたやうにしてよして、

『それなら何うにでもするが好い……。この蒲團などはいくらでも持つて行くが好い。しかし蒲團は持つて行つても、俺の心から體からかの女を取り去ることは出来まい。これは何うも止むを得ない。これは俺の責任ばかりではない。お前に

も責任がある……』かう言ふと、蒲團に手をかけてゐた妻の形をした姿は、いきなりそこに突伏してサメザメと泣いた。

五〇

その主人公の形をした姿と妻の形をした姿とは、その小説の中で次のやうな對話をしてゐた。

『私の心と私の體とを盗んだ女がそこにゐます。その中にかくれてゐます。何うかそれを渡して下さい……。後生ですから……』

『……』

『あなたはそれほどまでに心と體とをその女にわたして了つたのですか。いつの間はわたしたのです。何故、それならそれと私に言つては下さらなかつたのです。それが怨みです』

『何うも爲方がない……』

『何うしてです。ちつとも爲方がないことはないぢやありませんか。いつでももどつて下さることが出来るぢやありませんか。あなたは私達の心の故郷を忘れたのですか。私は谷合の草の中に咲いた一つの小さい花だつたのです。そこに下りて来たあなたは毛色の美しい小鳥だつたではありませんか？ そこには綺麗な谷の流と静かな雲とより他なかつた筈です。暴風雨などはなかつた筈です。それを忘れはしないでせう。それを思ひ出して下さい……』

『しかしそれは無理な注文と言はなければならぬ。かうして、そこから出て来て、世間のすさまじい巴渦に雜つて了つてからは、さうした故郷はもうこの身の心を惹かなくなつて了つてゐる。それはあまりに綺麗すぎる。單純すぎる。あのやうな境にはとどまつてゐられない……。それはお前は俺のやうにわるくない。また俺のやうにいろいろなことを意識してゐない。だから俺とお前とは離れて来

て了つたのだ。俺とお前とは永久にその谷合の静かな中にゐるべきだつたのだ。

そこにゐれば、こんなことにはならなかつたのだ……。しかしかうした争ひの烈しい世間に出ては、とてもさうした静かな單純な花では、この心は慰められないのだ。毒々しい、ともすれば人間のたましひを死に誘ふやうな花でなければ満足が出来なくなつたのだ……』

『だから、一層心配なのです』

妻の形をした姿は不安さうにその傍に歩み寄つた。

『無理に戻さうと思つたつて駄目だ。それならなぜお前はあの谷合の静かな故郷から世間へ出て来ることをこの俺に勧めたのだ？ あの時それを勧めたのはお前ではないか。お前が勧めたばかりに、この争闘の烈しい世間に出て来たのではないか……』

『だから、もう一度私の許にもどつて来て、一緒に世間をわたつて行つては下さ

「いませんか……」

『まア、向うに行け！』主人公の形をした姿は、忙しい身のいつまでもさうした
際限のない話に取合つてはゐられないといふやうに、『俺にはこんな爲事がある
のだ……。さういふ話はもつとゆつくりした時にしよう。それに、さういふこと
はひとり手にさういふ時期の來るのを待つより他爲方があるまい。俺だつて、何
もさうした毒草の花の色彩にばかりこだはつてゐるわけでもあるまい。いつかは
そこから離れて來ることもあるだらう——しかし今では、さうしたことよりも
つともつと大切なことがあるのだ。俺は形でこそそのんきにしてゐるが、心は忙し
さと眞剣さと焦々しさとで一杯になつてゐるのだ……。俺はぐづくしてはゐら
れないのだ。もつと一生懸命にならなくてはならないのだ。男の苦しみといふも
のはとても女にはわからない。女にはたゞ愛と嫉妬とがあるばかりだ。男の辛さ
などはわからない』かう言つて、その主人公の形をした姿は、鬨を排するやうに

して向うへと行つた。あとには妻の形をした姿の悲しい涙が残つた。

五一

一週間でなければ十日、それもその日が近くなる頃には、よく夢に壓された
り、夜中に起きてぼんやりと考へるともなく、そのことを考へてゐたりした。熱
い頭腦の中を深夜の雨がサツと音を立て、降つて行つたりした。

その日になると、かれは是が非でも出かけた。用事が俄かに湧くやうに出來て
來てもそんなことに頓着してはゐなかつた。遠い田舎から弟が出來たりするや
うな場合でも、また親戚に重い病人がゐて是非ともそこに見舞に行かなければな
らないといふ時にも、もつと眞面目に義理ある母親が、死床に横はつてゐるやう
な時にも、かれは決してそのため、その日の訪問をやめるやうなことはなかつ
た。『だつて爲方がない……。行かなければならないんだもの……。』かう言つてか

れは出かける支度をした。

しかもさういふ時には、かれはいつもその身の底の底にあるものにびたりと打突かつたやうな心持を経験した。何うにもかうにもならないもの、意志の力にも感情の力にも何うすることも出来ないやうなもの、更に言ひ換へれば、押し詰めて押し詰めて押し詰め盡したやうなものがそこにある……。否、そればかりではない、かれはそこに人間の心の暗さと明るさとの互ひに複雑に交錯してゐるのを感じた。そして其一方では、さういふものに引摺られて行く身のあさましさと意氣地なさを感じた。

『では、行つていらつしやいまし』

見送るものゝ聲を後にして、門を出て、通りに出て、そしてはじめてかれはほつとした。

散らすことの喜びと言つたやうなものをかれは第一に感じた。次ぎに、(まあ、

何うともなれ！ 世間なんか何うともなれ、今日一日はのんきに遊べ！) かういふ風に獨話した。かれは枳殻からたちの芽の青くツンツン出てゐるやうな垣添ひの路を急いで歩いて行つた。

何うかすると、その時、道の角あたりで、もとかれが勤めてゐた同じ社の昔の同僚などにひよつくり出會した。

『や……』

『何處へおでかけです？』

『ちよつと——』

『この頃はちつとも編輯へお出でになりませんね……』

『いつも御無沙汰ばかりしてゐます……。別に變つたことはないんでせう？』

『N君がやめましたよ』

『え、N君が——』かれはわざと驚いたやうにして、『さうですか。N君がやめま

したか？ やめなくたつて好かつたんでせう？』

『でもいろんなことがあるにはあるんですな？』

『それはさうでせうけれども……』

しかも両方ともその問題に深く觸れようとはしなかつた。またそれに觸れるほど深い興味を、そこに感じてゐなかつた。島田はその昔の同僚と並んで歩きながら、あの退屈な、いくらやつても少しも何うにもならない、卓上のザラザラした埃塵の多い社の編輯のさまを頭に浮べた。そしてそこに色彩のない、平凡な、退屈な、でなければつまらない争闘の絶えず巴渦を巻いてゐる社會を想像した。それに比べては、かれの生活はまだ生効のあるものと言つて好かつた。尠くともかれはかうして一日をのんきに出かけて遊んで來ることが出来る……。こんなことを思ひながら、和服姿のかれと脊廣姿の昔の同僚とは、五月の幟の鯉のはたはたする塀に添つた阪路を靜かに竝んで停留場の方へと歩いて行つた。

五二

きまつてその日には雨が降るといふやうなことがあつた。『あなたは降り性ね……あなたの出る時はきつと降るんだから、きまつてゐるんだから……』などといふ聲を後にして、かれはよく出懸けた。

昨夜まで星が降るやうであつたのに、今朝は洋傘ではとても出られないやうな風雨であつたりなどした。また連日好晴が續いたのに、その日あたりになると、空が曇つてしとしとと雨が庭樹の緑に降りそゞいだ。自分でも不思議に思はれるくらゐであつた。それは氣象の律見たいなもので、日を取替へさへすれば、それは全く反對になるわけだと思つて、さういふ風にして見たこともあつたが、やつぱりだめだつた。

それに折角のその思ひ立ちをやめるといふことが出来なかつた。何もそんなに

規則正しくやらなくとも好い。雨が降つたら、明日にすれば好い。あまりに自制心がなさすぎる。いつもさう思つて降り頻る雨をじつと眺めて、心を静めて机の前に坐つて見たりするのであつたが、やつぱり落附いてゐることが出来なかつた。その期間に醸されたかの女への空氣が既にあまりに濃厚にかれを包んだ。また止むに止まれずにかれを引張つた。

この週期的憧憬とでも言ふべきものは、初めてかの女を知つた時から今日まで續いた。そしてそれにもいろいろな心持が常について廻つた。大抵はその時に出かけて行つて、その憧憬を満足させることが出来たが、長い間にはその出来なこともないではなかつた。その時にはかれは苦んだ。泥沼の底にでも落ちたやうな暗い心の焦慮に燃えた。また、あたりが暗く體が北極の極寒地にでも行つたやうな冷めたい緊縮を感じた。爲事も手につかなかつた。否、とてもだめと知りながらも、無理に出かけて行つて、母親を困らせたことも度々あつた。母親が既

に匙を投げるやうな態度に出たときでも、かれは猶かの女をつかんで離さなかつた。(だつて、母^{おつか}さんの見たものと私とお銀との仲は違ふんですもの……。私とお銀との仲は、私とお銀とにしかわかつてゐないんですもの……。)これに近いことを言つたことをかれは今でも思ひ起した。

かれはよく雨に深い幌をかけて長い橋をわたつて行つたことを思ひ出すことが出来た。またあの長い土手から帆の重く雨にぬれそぼちつゝ靜かに動いて行くさまを眺めたことを思ひ出すことが出来た。葉櫻の緑に雨が盛んに降り頻つて土手下の藝者屋もひつそりとしてゐる中を、ぐしよ濡れになつて石の階段を下りて行つたことを思ひ出すことが出来た。雨が降つても雪が降つてもかれの必ずやつて來ることを母親も後には知つて、『そら私の言つた通りだらう。先生はきつといらつしやるに違ひないつて言つたらう?』などと言つて笑つた。震災以後は、停留場を下りてからの街道の路がわるいので、かれは一層多く雨に苦しむこととなつ

た。かれの新しい日和下駄は泥濘のために滅茶滅茶になり、かれの仕立下しのト
ンビの裾はハネで一杯になつた。それにも拘らず、かれは自動車やトラックのた
めに片側に押し寄せられた泥の波の堆積の中を一步一步拾ふやうにして歩いた。
かれはその泥濘の堆積の中にすら、かの女の眉や髪や唇の埋められてあるやうな
のを感じるのでつた。

五三

親しい友達が五六人寄ると、いつもさうした猥談と言つたやうなものが出るの
が例だつた。昔はてんでに柄にもない大口をきいたりして、よく大きな體を揺ぶ
つて笑つたものだが——今ではさうした形だけ丸で違つたものになつてはゐるけ
れども、それでも何ぞといふと、常に話がそこに落ちて行くのだつた。

同じ年輩のKが若い女を相手にして新聞の記事になつた時には、やつぱり同じ

年輩のHが眞面目くさつて、『Kさん、今に困りますよ……。あゝいふのは、身體の
方が續きませんからな』と言つたので、そこにゐた人達は皆などつと聲を立て、
笑つた。

と、Hはすぐあとをついで、

『だつて去年あたりにも、さういふことをやると三日も四日も身體が疲れてゐて
しやうがないとKさん言つてゐたんですもの……。とても長續きやしませんよ』
『それはさうだらうな』

Nが言つた。

『ところが、君、さうでないかも知れないよ……。好きな相手なら、存外體に利
かないさうだよ』

これはMだつた。皆なはMの方を見た。

『そんなことがあるかしら？』

『それはあるかも知れんな』

『若い、愛しい女なら、此方から積極的になつて行くから、存外さうかも知れないな』

こんな言葉はそこから此處からも起つた。

皆なはまた聲高く笑つた。

で、Kについての話はそのまま餘所にそれて、今度はその疲れる疲れない、といふことについて話に花が咲いて行つた。やれ、『何うも年を重ねると争はれないものだ……』とか、『もう、さういふことには全く興味を持たなくなつた……』とか、『でも、いくら向うが惚れた女で、此方が積極的に行つても、若い時のやうなわけには行かないだらうな』とか、一方で消極的なことを言つてゐると、一方ではそれを否定するやうなことを言つたりなどして、てんでにのんきなことを言つて聲を立て、笑つた。Aは半ば體驗的な話をそこに持出したりした。

島田は莞爾しながら、だまつてきいてゐるだけだつた。

『君は何うだね？』

Aは今度は島田の方にその話を向けた。

『何うもダメだね』

『そんなことはないだらう。君なんかこそ立派な體驗がある筈ぢやないか——』

『ダメだよ』

『いやに今日はしよげてゐるぢやないか。何うかしたのかえ？』

疊むやうにAが話しかけて來るのを島田は軽く受け流して、

『何うもさういふ話は聞いてゐる方が面白いな』

しかしもし相手がAでなく、また開手が大勢でなかつたならば、かれも一くさりの話ぐらゐはこゝろよくそこに持ち出したかも知れなかつた。現に、かれは曾て自らその身の體驗を語るといふやうに、

『でも、愛してゐる女なら、その疲れるといふことの上にも一種スキートな憂鬱と言つたやうなものが伴つてゐるくもないものだね……。あれはあれでまた忘れ難い……』

かう眞面目に言つたこともあるのだつた。

五四

ある時は島田は眞面目な調子で、『その疲労のスキートな味は、若い時には無我夢中だつたけれども此頃ではよくわかつて来るやうになつたね。その感じだけでも、立派に一篇の詩ぐらゐ出来さうな氣がするね』などと言つて、かれの周圍に集まつて来る若い人達を煙に巻いた。

『さうですかね。つまりそれが老年の戀といふやつですかね？』

笑ひながらいくらかひやかすやうにして若い人達は言つた。

『やつぱり體がそれだけいけなくなつてゐる上に、老人の貪婪といふやうな形もあるんだらうな』

『さうですかね……』

ひやかしては見たが、さういふ心持はちよつとわからないといふやうにして、若い人達はじつと島田の顔を見詰めた。

『生殖がなくなると、益々遊戯的になつて行くものだからね……。つまり意識が加はつて行くんだね……。そしてそのつゞきがさうなるんだよ』

實際島田はその疲労を題目にして何遍ソネットでもつくらうとしたか知れないのであつた。しかしかれには詩は出来なかつた。また今までの習慣では、さういふものは詩に作られてゐなかつた。かれは何遍か書きかけてよした。

逢つて来た日の翌日一日はかれはいつもさうしたスキートな疲労で楽しく世離れて暮したことをくり返した。その日はかれは大抵爲事をしなかつた。非常にさ

し迫つた爲事でもあれば別だが、些細なことでもその楽しい氣分を消して了ふことを恐れた。かれは獨りふらふらと庭を歩いたり、書齋の一隅に置いてある藤椅子の上に寝たり、外國の新しい短篇を読むでもなく讀まぬでもなく、のんきに頁を翻へしたりなどして暮した。尠くともかの女はまだそこにゐた。かれの身體からまだ離れて行つてゐなかつた。またかれがかういふ風にスキートな疲勞を味はつてゐると同じやうに、かの女の軀もやつぱりそれを感じてゐるであらうといふことが深くかれを楽しませた。それにさまざまの美しい楽しいイリュウジョンがその周圍を取り卷いた。そこに一つの繪が展げられた。かれはそれあるがためにのみ此生の幸福を讚美しようとした。尠くともそれは一日續いた。糠雨が降つたりする日はことに静かで好かつた。かの女の情がじつと深く體に染み込んで來るやうな氣がした。座にあるさまざまの花——黄い、赤い、白い、または紫の色彩がかの女の面影となつてかれの心に點された。そして晝からは大抵毛布を着て轉寢を

するのを常としてゐたが、それがまたいつものとは違つて非常に楽しかつた。静かに満ち足りた心持と、軽い微かな夢を誘ふに相應しい疲勞と、あらゆる勞苦から一時全く離れ去つて來たやうな安らかな感じとが、次第にかれを甘い睡眠の中へと伴れて行つた。

それにその感じがかれの體から次第に微かになつて行くさまが、かれに詩を思はせ戀愛を思はせ、また更にかの女の面影を思はせた。そしてそれは尠くともその日の夕方まで續いた。二三月の頃には、かれは庭の夕暮の空氣の中に白くつきりと梅の花の咲いてゐるのを眺めた。また春がおそくなつてからは、既に濃かになつて來る緑葉の夕やみの中に笑靨花のほのかに白くあらはれてゐるのを眺めた。そこにかの女が立つてもゐるかやうに。

それから数日の間はかれは専念に爲事に没頭するのだつた。かれは多くは書齋の中で暮した。街頭などには滅多に出て行かなかつた。

朝起きて楽しみにして啜る味噌汁、また時には子供達と一緒に榎木オリコギを動かして丁寧に磨つてそして濃いくらゐに延ばしたとろろ汁、晝はちよつとした鱈の鹽焼か何か、春の初めならば好いかをりのする蕨の羹モウ、夏ならば青唐辛子、さういふものの中に月日は間斷なく経つて行くのだつた。午後から逢ふことにしてゐる訪問客の姿や話なども細かにそれに雜り合つた。

一週間が十日になつても、爲事の都合で何うしても出て行くことが出来ないやうなこともたまにはあつた。さういふ時には、お銀は、『何うしちやつたの？ もう路を忘れちやつたのね？』などと言つた。しかしそれぐらゐならまだ好い方が、時には、『私なんかもう何うでも好いわね……それならそれと今の申言つて下さいよ。今ならまだ何うにか拾つて呉れる人があるかも知れませんから……』な

どと意地わるい厭がらせを言つた。しかし烏田は決してそれをわるくは思はなかつた。その言葉の中にすら、かれはかの女の體を發見した。かれの體はそのために一層其方へと引張つて行かれるやうな氣がした。

『もう何うしても駄目ね』

その時には、いつもさうした言葉がかれ等の間に取換はされるのだつた。しかしそれは何が駄目なのだか、かれ等の戀が駄目なのだか、それともまたこれではとても何うにもならないといふのか、またこれほど思ひ合つても人間はやつぱり人間で別に翼も生えないと言ふのか、またそれとも單に何うしてもかれ等はもはや別れられなくなつたといふのか、その内容はそれははつきりしてゐなかつたが、しかも兎に角さうした言葉が出るのだつた。つまり言葉ではとても、言ひあらはせない複雑な感情が、無器用にまた端的にそのはけ口を求めて、そこに唐突に出て來るのだつた。

そしてその言葉を取交はしたあとでは、かれ等は常に長く沈黙した。それは沈黙でなければ、折角泥み合つたその心持が忽に逃げて行つて了ふことをかれ等は恐れたからであつた。時には二人とも何故か涙ぐましいやうな心持になつた。

『昨夜火事があつたらう？』

その心持を轉回させるために島田はこんなことを持出した。

『え……』

『かなり番地が近いやうだつたから心配した——』

『さう大してさわぎもしなかつたけれども、それでも、お爺ちゃん、二階の窓を

あけたら眞赤だつた——』

『火の子が來はしなかつた？』

『少しは來たでせうね。いくらか風下になつてゐましたからね……』

『何しろ、番地が近いから、今朝新聞を見ておやと思つた——』

『私はちよつと起きて見たけども……寒いから、すぐまた床に入つちやつた——』
さうした對話が不釣合ながらも、その心持を次第に靜かに澱ませて行くのだつた。島田の眼には、寢衣のまゝでその火事を見に、一枚明けた雨戸のところへと出て行つたかの女の姿がそれとはつきり映つて見えた。

『何うもこの近所は火事が多いところだね』

靜かな調子でかれは言つた。

五六

一夫一妻といふことがまたしみじみかれに感じられて來た。何うしてもひとりといふといふことになるのである。それでなければ體が承知しなくなるのである。他に別なものが存在してゐたりしては、とても深い深い體の合一を見ることは出來ないのである。こんなことを考へてかれはいつも頭を振つた。

そしてその時には、その心の状態がいつも生活の革新といふ方へと向いて行つた。幾人も幾人も平氣で細君を取換へたために、その時分世間の問題となつてゐたIの方へと向いて行つた。あゝいふ風にする方が本當だといふ風に思つた。精神的にその日ぐらしに暮して行くといふことは男らしくないばかりではなく、不道德で且つ罪惡であらねばならぬやうにすら、かれには思へた。しかし、やつぱり何うにもならなかつた。

流石にこれまでもその心をお銀に打明けて見せたことはなかつたのであつたが、ある時種々に考へて見た結果、かれは眞面目にそれを言ひ出して見た。

お銀にもかれの心はわかつたらしかつた。かの女はじつとかれを見た。俄かに感情が迫つて來たといふやうに、かの女の眼からは涙が流れ出して來た。

『何うしたんだえ？』

思ひがけないことだつたので、かれはじつと其方を見た。

お銀は顔を両手で掩つたまゝだつた。暫くはその獻^{オクリヤキ}を止めなかつた。

『……………？』

『何うしたんだえ？ 本當に？』

『でも……………』

かう言つて、かの女はやつとその獻^{オクリヤキ}をやめた。やがてにつこりして、

『私本當にすまないやうな氣がしたんですもの……………』

『でも、お前にもさういふ風に考へられるだらう？』

『それはさうですけれどもね……………』

それは此の世ではとても實行が出来ないことだといふのであつた。これでその身は澤山だといふのであつた。それはをりをりはさびしさと退屈さとのために種々なことを考へたり言つたりするけれども、それは極めて些細なことで、島田の言ふことの重大さにはとても比ぶべくもないといふのであつた。従つてさう思つ

てゐてさへ貰へればそれで満足だといふのであつた。

『でも、考へると罪ね……。私達はそれだけでも、死ねば眞逆さまに地獄ね』

『何うして？ そんなことはないと思ふな』

『でも』

『だつて、それは結果ぢやないか、さういふ意志があつてやつたことではないぢやないか。もし罪だとすれば、お前に逢つたといふことが、不用意にお前とさういふことになつたといふことが呪はるべきで、それより他には、何も地獄に墮ちるわけはないぢやないか』

『それはさうですけどもね……。女はまた男とは違ひますからね……。』簡単にさうきめてのんきにしてはゐられないといふのであつた。言ふに言はれない悶えが、口でいくら説明しようとしても説明されない苦しみ、そこに巴渦を巻いてゐると言ふのであつた。そしてそれは單に第三者にすまないといふやうなもので

はなくて、さうした深い心の淵に落ちたといふことの上に、ひとり手に醸されて來る暗い影の壓迫のやうなものらしかつた。

五七

かれの家庭のこともをりにはかれ等の口に上つた。

『慶子さんはもう今逢つてもわからないでせうね？』

『さア』

『もう十七におんななすつたのね……。早いものね。宅に私が伴れて來た時にはまだ九つでしたかね、もう學校も卒業でせう？』

『來年だね』

『もうさうなるんですかね。年月ツて早いもんですね！』お銀は考へるやうにして、『可愛い西洋人形か何かのやうな眼をしていらつしやいましたね。あの時市村

座へ行きましたね。まだ覚えていらつしやるかしら？」

『それは覚えてゐるとも……。芝居の話になると、いつもあの話が出るよ。何しろあの時慶子は生れて始めて芝居といふものを見たんだからね。あの時くらゐ不思議な何とも言へない気がしたことはないって言つてゐたよ、此間も——』

『慶子さんはお怜悯ですからね。学校もお出来になるでせう？』

『まア、出来る方だらうな……』

『結構ね……。今度いつか伺つたら、逢はせて下さらない？』

『あゝ』

島田は止むを得ずに軽く黙頭いて見せた。

『やつぱり逢はせない方が好いのでせう？』

『そんなことはないよ』

『でも、私になんか逢はせるのはいけないんでせう？』

『そんなことはないよ』

『後生だから今度行つたら逢はせて下さいね……。たゞ大きくなつたのを見せて頂けばいいのよ。それはね、ソツとして置く方が無事だといふことはわかつてゐるんですけどもね、何にもそんなに私を遠ざけなくつたつて好いと思ふのよ』

『遠ざけるわけぢやないよ』

お銀にしては、今は別にその身とは何の交渉もないことだけれども、しかも交渉なしにさういふ子供達が皆な大きくなつて行くといふことには全く無關心ではゐられないやうな気がした。

『さう言へば、この間、志摩子が母さん、母さんツて言ふから、何だと思つたら、母さん、私にも幾人もお姉さまがあるのねツて言ふのよ。学校で皆なでそんなことを言ふんでせう、きつと——』

『……………』

『それから、私、あるともね、いくたりもお姉さまもお兄さまもあるつて教へてやつたら、何うしてさういふお姉さまやお兄さまが家に一度も来ないんでせうね？』
『不思議さうにしてゐましたよ。やつぱりさういふこと氣になると見えるのね……』かう言つたが、すぐ言葉をかへて、『一番總領の方はもう大學を卒業するんでせう？』

『まだ一年だよ』

『それぢや來々々年ね……次のは？』

『それはまたずつとあとだよ。高等學院に入つたばかりだよ』

『私、常太さんは知つてゐますけれども、その次の方にはまだ一度もお目にかゝつたことはないのね……』

『さうかな』

『好いお見さんでせう……。屹度さうだと思ふわ。常太さんはあなた似だけれど』

も、その方は奥さんそつくりでせう？』

『よく知つてるね』

『だつて、さういふ氣がするんですもの』

五八

お銀は話頭を轉じて、

『糸子さんは、まだあとはお出来にならない？』

『そんな話もなささうだね……』

『別に變つたことはないんでせう。よくお目にかゝつてゐた故か、仰しやることがさつぱりしてゐて、私なんかには好く氣が合ひさうですね……』

『さうかも知れないね』

島田にしては、さういふ風にかれの子供たちにお銀が觸れて來ることを餘り多

く好まなかつた。しかもお銀は猶ほ續けた。

『臺灣に行つていらしても、仲が好いからさびしいなんて仰しやつて來ないでせう。やつぱり當人同士好い方が好いのね。親が選んだものでも、好い具合に行けば好いけれども……一番好いた同士が好いのよ』

『それはさうだね』

『私、お手紙を上げたいと思ふこと度々あるんですけども……上げてはいけなにかしら？』

『いけないこともないだらうけども……』

『けども、いけないのね？』

『何うしてさういろいろなことを考へるんだらう？ 子供達なんか、何うだつて好いぢやないか。ちつとも此方に關係したことはないぢやないか？』

『なら、あげないわ……』

かれ等は黙つて了つた。お銀にしても、自分の言つてゐることの徒勞であることを知らないではなかつた。いくら言つたところで、またいくら此方から近寄つて行つたところで——更に深くかれの家庭に細かに雜り合つて行つて見たところで、とても一緒に混り合ふことが出來ないのは、それは數年前にもさうした體驗を持つてゐるのでよくわかつてゐるのではあるが、それでも全く痛痒相關しない他人でゐることは出來ないやうな氣がした。否、全く他人で置かうとする島田の心が一種のさびしさをかの女に與へた。かれの可愛がつてゐる子供達を何うして自分も可愛がることが出來ないのだらうか。かれが老後の唯一の寶として育てゝゐるものに何うして自分が觸れて行くことが出來ないのであらうか。また自分の許にゐる志摩子にしても何うしてさういふ兄や姉に近寄つて行くことが出來ないのだらうか。

『やつぱり私は何處まで行つても蔭の人といふことね？』

またそこに落ちて行くのだつた。島田は痛いところでも觸られたやうにたゞ顔を蹙めた。

お銀にしては、かれの子供達の皆立派に大きくなつて、男の兒は大學を卒業し、女の兒は、それぞれ好いところに嫁いで行くことを望まないわけではないけれども、むしろそれをかれと同じく喜ぶといふやうなところもあるにはあるのだけれども、しかもさういふ風に圓滿にその家庭が發達して行くといふことの上に、ひとつのさびしさを感ぜずにはゐられないのだつた。かの女はそこに一種の嫉妬——むしろ競争見たいなものを意識した。

五九

『それから何とか言ふ方がゐるぢやありませんか……？、そら、慶子さんのすぐの姉さん？』

『房子だらう？』

『さう／＼房子さん……』お銀はかう言つたが、すぐほき出すやうに、『あの方、私大きらひ……』

『いゝよ、いゝよ、わかつてゐるよ。その話はきいたよ』

かれは煩ささうに手でそれを遮るやうにした。

『だつて、私があゝの玄關のところに出て來ようとする、何ッて背が低いんだらうッて言つたわよ』

『それは何かのきゝ違ひだつて言ふのに……』

『うそ、うそ……』

お銀は急に躍氣となつて、『だつて私、ちゃんと聞いたんですもの……。私、あの時ばかりは腹が立つのを通り越してあきれちやつたわ。だつて、私は何ッて言つたつて、お客さまぢやないの？ そのお客さまがまだ歸りもしないのに、脊つ

低だなんて言はせる法はないわねえ。だから、奥さんが平生きつと口癖のやうに言つていらつしやるのよ。脊つ低で、ちんちくりんで、あんな女、父さん、何處が好くつて、いつまでもくつついてゐるんだらうなんて言つてゐるのよ、さうよさうよ、屹度さうよ……』

傍から島田が口を挿む餘地などは作らせずに、

『さうに違ひないのよ。でなくつちや十一や十二の子供が何うしてそんなことを言ふもんですか。ちやんとわかつてゐるんですよ』

『好いぢやないか、そんなこと!』

『ちつともよくはないわ……。だから、あの房子ツて言ふ子嫌ひさ!』
いかにも憎々しさうな口振でお銀は言つた。

『……』

『きつとお母さん似なんでせう?』

『……』

『本當に、あの時ぐらゐ、私、くやしかつたことはない……。その證據にはずつと停留場に来るまで、そのことばかり考へてゐましたもの……。だから、あの子大嫌ひよ』

この話はこれまでも二三度は出たのであつた。初めの時には島田はかなり強くそれを辯解した。その房子といふ次女は、何方かと言へば慶子よりもつとずつとおとなしいやさしい兒で、そんなことを言ふわけがないと言つた。その時、お銀は、『それはさうでせう……。何んな兒だつて、あなたの兒ですもの、さうわるく言はれるのはいやでせうよ……。だつて事實だからしやうがありませんよ』と言つて後にはかれを怒らせた。さうした二三の經驗は、實はかの女とかれの家庭とを遠ざからしめた大きな原因となつてゐるのであつた。兎に角お互ひに雜り合へないといふことが、また平生一緒にゐることが出來ないといふことが、離れてゐ

る間は何をしてゐるかわからないといふことが、口ではうまいことを言つてゐるが、かげでは何をしてゐるかわからないといふことが、やつぱりかの女のその間の行動が、かれを苦しめ且つ惑はせると同じやうに、かの女を不安に導かずには置かないのだつた。結局一人と一人だといふ話を持ち出した時にも、かの女はそれを本當とはせずに、イ、イと言つて、かれをおひやらかすやうにして白い歯を出して見せた。

六〇

『何うしてもさういふことは出来ないものなのかな!』

暫くしてから深く慨嘆したやうに島田は言つた。お銀は黙つてゐた。別なことを考へてゐた。

ある期間その沈黙が続いた。

『それを考へると、人間といふものは情ないものだな!』

お銀は急に、

『何ですって?』

『何でもないけれどもね。何もさう物事をひとつにつけて考へなくつても好いと思ふんだがな!』

『私がそんなことを考へなくつても好ささうなもんだつていふのね?』

『別にさういふわけぢやないけども、何もいろいろなことをくつつけて問題にする必要はないからな。お前は僕の愛を信じてゐさへすれば好いぢやないか。他のことなんか何うだつて構はないぢやないか。僕の子供が何うしようと、家庭が何うしようと、そんなこと問題にしなくつても好いぢやないか。二人のことは二人のことぢやないか。外のものゝことなんかそれに雜ぜなくつたつて好いぢやないかと思ふんだがな……』

『だつて、私に關係して来るんですもの……』

『それは僕の心がわかつてゐないからだねえ！』

『さうかも知れないわ……。だつて、いくらあなたを信じたからつて、でくの坊か何かのやうに、右向けつて言へば右、左向けつて言へば左つていふやうに素直にばかりしてはゐられませんからね……。私だつて、あなたが何うなるかといふことを考へずにはゐられませんからね……。皆な動いてゐるんですもの……。一時だつて人間の心は同じでゐることは出来ないんですもの……』

『それはさうだ——』かれの疑問もそこにあるのだつた。やつぱり人間は雜り合はずにはゐられないのか。ひとつの影響がそのまゝ、他に影響を與へずにはすまされないのか。相對してゐるものだけでその事はすまされさうなものだが、さうは行かないものなのだらうか。それはかれにしても今までそれを考へぬのではなかつた。否、むしろそれを人一倍考へに考へたればこそ、また人間が互ひに雜り合

つたり利用し合つたりすることを卑しいと思つたればこそ、その周圍を綺麗にして置かうとしたのだけれども、それも人間には出来ないことなのだらうか。たとへかれの行爲が何の關係も何の交渉も持つてゐないにしても、それでも何等かの影響を暗々裏にかれの家庭に與へずには置かないやうなものだらうか。かれはそこまで考へて來てまた深い沈黙に墮ちた。

『私のやうなものに出會したことがあなたの不運ね！』

散々種々なことを考へ直したといふやうにしてお銀は言つた。

『まア、しかし餘りさういふことは考へない方が好いよ。つまりさういふことを考へるのはさびしいからなんだらうが……。もう一度向うに歸つて見たら何うだ——しかし誤解しちやいけないよ。さういふつもりで言ふんぢやないんだから——』

『それは誤解しやしませんけどもね。もう向うに歸ることなんかちつとも考へた

ことはないわ。もうあゝいふところはずくづく厭——』
お銀はかう言つて手を振つて見せた。

六一

『私、本でも賣つて見ようかしら？』

ある時お銀はだしぬけにこんなことを言つて島田を驚かした。

『本？』

『そら、雑誌だの、本だのいろいろ賣つてゐる店があるでせう。あゝいふ店をやつたら何うかと思ふのよ？』

『何うして急にそんなことを思ひ附いたんだね？』

お銀の言ふところに由ると、その坊主の學校の門のところ、最近博士號を持つてゐたといふある學者の未亡人が店を始めて、ハイカラな小女を使つて、學生

相手に小説だの雑誌だの宗教の本だのを並べてそれで結構生計くらしが立つて行くやうだが、あれはそんなに忙しくもないやうだし、綺麗でもあり知識階級を相手にするのだから、かの女などがやるのには一番適當してゐはしないかと思ふを見て急に思ひ付いたといふのであつた。そしてお銀は猶ほつゞけて言ふのだつた。

『かうしてたゞあなたにばかり負おまさつてゐるよりは、さうして何かに取附いてゐれば、面白くもあるし、張合もあるし、あなたが何うかなつた時にだつて、そんなに困らずにすみませうからね……』

『やつぱり退屈だと言ふんだね』

島田は笑ひながら言つた。

『さうばかりぢやないんですけどもね。さうすれや何かにつけて好くはないかと思ふのよ。志摩子のためにだつて好くはないかと思ふのよ』

『博士の未亡人て、何んな人だえ？ まだ若い人かえ？』

『いえ、その人はもうお婆さんですけどもね……。てきばきして好い氣象きさちの人なのよ。あゝいふ店は、最初に近所の仲間か何か少し金を出せば好いんですつてね?』

『そんなことまでもう聞いて見たのかい?』

『さうぢやないけども、ちよつとそんな話をしたのよ。お金だつて、そんなにいらぬらしいわねえ……』

『でも大變だよ。雑誌屋は——』とてもかよわい女の腕では、本や雑誌の持運びだけでも容易ではないことなどを島田は細かに話した。

『さうですかねえ』お銀はいくらか失望したやうに、『私はまた、あなたはさういふことはよくわかつてゐるし、本屋さんだつて知つてゐる人が多いでせうから、便利だとも思つたんですけどもね……』

『まア、その點は便利だと言へば便利だけでも——』折角眞面目に思ひ立つたの

を、とても不可能とはわかつてゐても、すげなく打消して了ふのも何うかと思つて島田は靜かに優しく言つた。

『化粧品も持つて來て置きさへすれば、賣上げだけで利益になるといふのですけれどもね。あれは何うしたつて水商賣に近いですからね。それに、私の従妹でパンや菓子を持つて來て置いて内職にしてゐるものもありますけれどもね……。それだつて儲かるんですつて……。結構、お小遣ひぐらゐにはなるんですつて、でも、食物を置くのはいやねえ……』

『さうだね、食物は大變だね……』

『やつぱり、それぢや、本屋さんもダメかしら?』

『まア、考へて見るさ——』かれはとても駄目でも無下にお銀に失望させたくなかつた。

化粧品店のことではかれはいくらか氣まづい思ひをした。それは、他でもない、その話をかの女にした人が、ずつと前にかの女の戀愛の相手であつたからであつた。それをお銀は別に何でもないことのやうにして話すのだつた。

『だつてお前……』

『ダメでせうかね?』

『その話は好いかも知れないけれども……變ぢやないか』

『何が?』

傍でそれをきいてゐた母親は、『お前も餘程凡くらだね』

『何うして?』

『まだあんなことを言つてゐる』

母親はあきれたやうにして笑つた。

お銀にもそれとわかつてゐるらしくあつたが、わざと意外だといふやうな顔をして、『まだそんなことを言つてゐるんですか? あきれた!』

『だつて、さうぢやないか、お前!』母親は眞面目な顔をした。

『そんなことを考へてゐるんですか? 先生——』

お銀は島田の顔を覗いた。

『さういふわけぢやないけどもね……』その化粧品の店を始めて、その昔の戀人からいろいろと品物の世話を見て貰つたりするといふことは、それはちよつと困るといふやうな表情を島田はして見せた。

『さうですかね。男つてさういふもんですかね』

お銀は徐かに笑ひながら、

『だつて、母さん、それはさうですね?』

『さうですとも……。そんなことが出来るもんですか。一體この人はのんきすぎますよ』

『だつて、此方さへ何でもなければ好いちやありませんか？』

『でもね……。』

『そこに行くと、女の方がやつぱりさつぱりしてゐるのかしら？ 私なんか、ちつともそんなことを思つたことはありませんもの……。昔は昔よ。そんなこといつまで思つてゐやしませんよ……。向うだつてさうよ。この間途でひよつくり逢つた時だつて、何とも思つてゐやしないのですもの。先生、いつもお變りなくつて結構ですななんて言つてゐるんですもの……。あなたの考へてゐるやうなものぢやないのねえ！』

『さア、それは何うだかな……。』

『やつぱりあやしいつていふの？』

『何うもこればかりはいつ火がつくかわからないからな！』かう島田が言つた時には、さうしたこまかい心持からはずつと離れて來て了つてゐた。

『それなら、私、止すわ……。何もそんなに無い腹をさぐられて、化粧品のお店なんかやらなくなつて好いんですもの……。』

『さうともね』

傍から母親も合せた。

『それに、化粧品だつて、他所見にはちよいと小綺麗な商賣に見えるけれども、いろいろ流行すたりがあつたりして、本當にやるとなると、随分厄介なもんださうですからね。……。』

お銀はいくらか失望したやうに、『やつぱり私達に相當した樂な商賣なんかありやしませんね……。やつぱりもとの空阿彌が一番好いのね』
こんなことを言つて笑つた。

島田は郊外の新開地などを歩きながら、よくお銀の言つたことを思ひ起した。そこに曲り角に新しく建てられた二階屋がある。そこに明るく夕日が當つてゐる。向うには陸橋がかゝつてゐて、下に汽車のレイルが眞直に通つてゐる。時々電車や汽車が喧しい響を立て、通つて行つた。

かれはその二階屋にお銀を置いてゐるいな空想に耽つて見たりなどした。烟草を賣る瀟洒な店。そこに近所には見られないやうな粹な丸鬚に結つた細君。細君と言ふよりは、何うしても下町風のお上さん。見る人が見ればすぐその素性がそれとわかるやうな身の周圍まわり。そこに若い大學生などが停留場への行きかへりに立寄つて烟草を買ふ。近所でも評判になる。『さうですとも、旦那さんが来るんですとも……。肥つた、大きな、もう半分髪まげの白い方ですよ。此間ついそこで見かけ

ましたよ』でなければ、『さうですか、あの人が旦那ですか。道理で、いやにピラシヤラしてゐると思つた』でなければ、『あゝいふ人はのんきで好うござんすね……。あそび半分に煙草でも賣つてゐれば好いんですから』などといふ蔭口がそこにもこゝにも起つた。しかもそんなことには頓着せず、かれはそつと裏から入つて行く。そこに母親がゐる。お銀も店から長火鉢の方へとやつて来る。『何うだね？ 商賣はうまく行きますかね？』などとのんきなことを島田は言ふ。お銀はお銀で、『賣れるのよ。商賣ツて中々忙しいものね。それに儲けが細かいからとても厄介よ。一日立つたりゐたりして、お世辭も随分言つたつもりで、夜はぐつたりしてすぐ寝て了ふくらゐに働いても、十五圓と賣上げがないでせう。二割儲けたところで、三圓ぢやないか？ 馬鹿らしいわねえ、普通の商賣なんて……。向うにゐたやうな量見では、とてもこんなことは出来ないわねえ！』などと笑ひながら言ふ。それなら懲りたのかと思へば、さうでもなく、面白くないこともな

いやうな調子だ。やつぱり月々きまつたものを貰ふだけの生活よりは楽しみらしい……。かれはそれを實行しようか。その方が結局は、まぎれてゐて好くはないか。自分で自脈を取つて、日蔭もののやうに他から言はれて、それを苦にさせて置くことは傷々しいではないか。こんなことを考へて、かれはその二階屋の前を通り過ぎた。

かれはそれに類したことをよく頭に浮かべた。さういふ人たちの圍はれて住んでゐるやうな住居。半ば世間に雜り合つて暮してゐる生活。さういふ生活は決して少くなかつた。市の塵の中にもさうした美が巧にかくされてあることをかれはよく目に留めた。肴屋の二階にも、巷路の奥の門の中にも、またある町の小間物屋の店にも……。そしてかれはさういふ人たちに丸で他人でないやうな共鳴を感じるのであつた。何故といふのに、その人たちもお銀と同じやうに、やつぱり外から来る旦那を待ち、その來ようが遅ければ心配し、その顔を見れば普通以上に喜

ぶといふやうな生活をしてゐることがはつきりそれとわかるからであつた。かれはあちこちで目にするさうした人たちの生活の中に、いつもお銀を發見することを例としてゐた。

六四

夫妻生活でもやはりさうした生活が行はれ得るとは、かれには何うしても思へなかつた。それはこれまでの體驗がかれに教へた。

新婚當座は夢中で過ぎた。それは享樂と言つたやうなものではなかつた。もつと無意識だつた。さうであらねばならなかつたために、さうであつたといふ様な形にしか過ぎなかつた。いつの間にか子供が生れた。そして戀は愛に變つた。女に取つては男も必要だが、それ以上に子供が必要になつて行つた。子供を育て、行きさへすれば、そこに最後のかくれ場所があるといふ風になつて行つた。もは

やそこには戀がなかつた。

『しかしさういふ風に獨斷的に考へてきめて了はなくつたつて好いだらう。君の考へ方はあまりにきめすぎるよ。もつと神祕の境に置く方が好い……』これはよく島田がその友達からも言はれることだが、それはよくわかつてゐるが、しかしさういふ形にのみ満足してゐることの出来ない彼であつた。汚れ切つたやうな夫妻生活。それも汚れた中に戀とか詩とかいふものが残つてゐればまだしもだが、全く泥に塗れて何處を探しても美しさなどの少しも残つてゐない夫妻生活。『それは君の夫妻生活が失敗だつたのだ……。それを以て他を律するのは餘りに獨斷にすぎる』それを聞いて、ある友だちはかう言つて攻撃した。またある友だちは、『それは日本の家庭といふ制度が不完全だからだ……。一夫一妻で一生一室の中に閉ぢ込められて置かれるやうな制度では誰れだつて退屈せずにはゐられないよ……。だから、今日では家庭といふ制度を打壊して、もつと自由にはなやかにする

のだな！　それが一番急務だ！』といふやうなことを言つた。それなら、奈良朝か平安朝時代のやうに夫妻が別居生活をすれば好いのか。しかしそれは退歩で、今の人たちには相應しくない、それにはもつと新しい生活がありさうなものだ。こんなことをかれ等はよく議論して來た。そして結局何處に行つたかといふと、やつぱり昔の人たちの大勢やつたやうなところに墜ちて行つて、何うにもならないもの、あるまゝにあるより外しかたがないものといふ深い深い陷穽の中に墜ちて行つて了つてゐるのだつた。

終ひには島田は自分で自分に言つて見た。

『そんなことは何うでも好いのだ！　美しくさへあれば好いのだ。自分の心を惹くものでさへあれば好いのだ……』

かれはその時丁度ある坂を下りようとしてゐた。

向うから一人の大學生が歩いて來たが、近寄るにつれて、それはかれの長男の

常太であるといふことがわかつて来た。かれはすぐ向うにある電車の停留場から下りて来たのであった。

『おい！ お前か？』

『……』

常太は少し顔を赤らめたが、何も言はずに——爺おやぢなんか逢つたつて何も面白いことはないといふやうに、挨拶もせず、そのまゝすたすたと向うに歩いて行つた。鳥田もまたそれについて歩いて行くやうな興味を持つてゐなかつた。見ることが中に常太はぐんぐん坂を下りて向うの方に見えなくなつた。

妻は妻、兒は兒、自分は自分といふやうにテンデンバラバラに暮してゐる、かれ等の生活がはつきりそこにあてつけられるやうな氣がした。かれは足を留めてじつとそこに立ち盡した。

六五

かれは全く離れて暮した。従つて子供たちにしても、好々爺としての父親を知つてゐるばかりで、かれが本當に何ういふ生活をしてゐるかといふことなどは知らなかつた。

その日途中で常太に逢つた話をする、お銀は言つた。

『それで常太さん、あなたの此處に来るのを知つてゐるんでせう？』

『知りやしないよ』

『だつて常太さん、もう大きいんでせう。知つてゐますよ。世間でいふのをきいてゐますよ』

『そんなことはない』

かれは頭かぶりを振つた。

『さうでせうかしら？ もう一體いくつになるんですの？』

『二十三だよ』

『それぢや無論、父さんは何をしてゐるかくらゐのことは知つてゐますとも……』
(やつぱりあなたも親馬鹿ね)と言つたやうな表情でお銀はかれの顔を見て、『そんなこと何とも言つたことはないんですか？』

『それはないね……』

『私のことなども何とも言はない？』

『それはないとも……。そんなこと丸で知つてゐはしないんだもの……』

『そんなことはないでせう？』

『本當に知らんのだよ』

『書齋なんか入つて來ない？』

『それは入つて來ないよ。書齋は神聖にして犯すべからざるものにしてあるから

ね！』

『でも、鍵がかけてあるわけぢやないんでせう？』

『それは鍵はかけてないけれど……』

『なら、わからないわ……。留守の時なんかに入つて見ないとも限らないわ。その時分には、男の見なんか随分敏感で、そして不良よ……』

『それはさうだね……』

『私なんか、女でも十五六のころに、親の祕密を知りたがつたものよ。親は何んなことをしてゐるんだらう——さういふよりも何か他の内所にしてゐることを知りたいのね。箆筒なんかよくこつそり明けて見たわ』

『お前もやつぱり不良だつたんだな』

『さういへば、さうかも知れないのね。しかし子供や學生なんていふものは、一體にさういふものよ。志摩子だつて、何うかすると、もう油斷がならないと思ふ

ことがあるんですもの……』

『それはさうだね』

『あなたにだつてさういふ覺えがあるでせう？』

『それはないこともないな……』

島田も昔を思ひ出すやうにして笑つて、『兄貴の本箱の中なんかをよく探したもんだよ。それも始めからさういふわけぢやないんだ。始めは必要な本か何かあつて、書齋にさがしに行つたものなんだが、ひよつくり變な本を發見しちゃつたんだね……。それから病みつきになつて始終こつそり見たもんだがね。大人といふものは、こんなものを見るのかと思つたね……』

『それ御覽なさい……あなただつてさうだつたでせう？』 お銀は笑つて、『だから、油斷がならないツていふのよ』

『大丈夫だよ』

『常太さんでも、そのつぎの男の兒でも、そんな風ぢやないんですか？』

『僕等のやうに不良ぢやないやうだな。……もつとのんきらしいね……』

『それが油斷よ……。何をしてくわかるものですか。あなたの書いたものなんかすつかりもう見てゐてよ。爺おやぢのやつめ、何食はぬ顔をして、あんなことをしてやがるなんて思つてゐるわよ』

『さうかな』

かれは笑ひながらもいくらか考へるやうにして言つた。

六六

さう島田は言ふけれども、何處までそれが實際の状態であるかはわからなかつた。たゞお銀には子供たちがいつの間にか大きくなつて、いざといふ時には皆な母親の味方になるといふことが氣になつた。

『それでも皆なおとなしいにはおとなしいのね?』

『うむ!』

島田は何となく煮え切らないやうな返事をした。かれは數年前に起つた房子の間違いについては、お銀にすらまだ話してはゐないのでつた。房子は自分の家の近くに住んでゐるある文學青年にそゝのかされて、少しの間家出をしたことがあつたのだつた。

『どなたにも別に變つたことはないんでせう?』

『うむ!』

同じやうに氣のぬけた返事をして、『まア、好いよ。そんなこと』

『やつぱり、私にははつきりと言ひたくないのね。かくして置きたいのね』

『そんなことはないよ』

『なら、もつと詳しく話して下すつたつて好いぢやないの? 私だつて、少しは

心配してゐるのよ。此處の家主の息子なんか、やつぱり爺があんな若い女を何處からか伴れて來て酒を飲んで大口をきいたり何かしてゐるもんだから、息子たちは皆な出來がわるくつて、總領は未決に入つたりしてゐるのよ。次男は次男で、中學校を退校させられて、不良團の團長をしてゐるんですつて……。やつぱりああいふ家庭では、子供は何うしてもさうなりませんからね』

別にかれに當てゝ言つたつもりではないが、近くに住んで、朝に夕にそれを目にしてゐるので、それでひとり手にそれが島田の息子たちに比べて考へられるやうな形になるのであつた。さういふ話はこれまでも度々出たが、いつも大抵は島田はだまつてゐた。かれも自分の子供たちのことを念頭に置かないのではなかつたが、しかもそれをさういふ風に不良な息子たちと一緒にされることを好まなかつた。

『まア好いよ』

『でもね、大抵不良な子供はさういふ家庭に多いやうですね。そら、あの大臣をしたことのある正木さんなんかでもやつぱりさうよ。子供の出来が皆なよくありませんからね……』

傍から母親はだしぬけに言つた。『お前、あんまりそんなことをお言ひでないよ。先生のお宅の坊ちゃんに當てつけがましいぢやないか。先生はそんなこと疾うに御存じだよ。先生のやうなお宅にそんなことがあつてたまるものかね』

『それはさうよ。あてつけて言つてゐるわけぢやないのよ。しかし氣をつけるのに越したことはないと思ひますからね。お子さんたちが父さんのことを皆な知つてゐたりなんかすると、何うしてもさういふ悪影響を受けますからね……。それで心配して言つてゐるのよ』

『まア、大丈夫だよ……。今のところでは——』島田はかう軽く笑ひながら言つた。しかもかれの胸には、房子の間違ひのことやら、子供たちが大きくなつて油斷

が出来なくなつたことなどが重苦しく鉛のやうに横たはつた。

六七

子供たちが段々その存在を明かにして行くといふ形は不思議だつた。以前にはかれは子供などに對して別に何とも思つてゐなかつた。それはその教育には人並に骨を折つた。男の兒が中學から高等教育に入る時にも、また女の子が小學校から女學校に入る時にも、種々な心づかひもして來た。しかし要するに子供だつた。子供のこととその身のこととは全く違つてゐた。

かれの藝術上の苦しみや生活上の悶えが、深く子供の内部まで雜り合つて行くといふやうなことはなかつた。

従つて子供も自由に延びて成長した。恐らく子供達はかれ等の置かれてあるところの何ういふところであるか、好いところであるか、わるいところであるか、

不愉快なところであるか、愉快なところであるか、それすらはつきりとは意識してゐなかつたに相違なかつた。かれ等はたゞ欲するものを得た。要するものを得た。遊ぶものを得た。朝、起きて袴を穿き、制服を着て出かけた。そして午後になるといつもその時間にきつちりと歸つて來た。その生活は判で捺したやうだつた。

世間では子供といふものを非常に色彩の多い自己の對照にしてゐるものが多かつた。或人はそれに重い希望を懸けた。また或人はそれを生活の痛苦を慰める唯一のものにした。また或人は、それあるがためにのみのこの人生は光明だと言つた。恐らくさういふさまざまの状態は、孰れも簡単に片附けて了ふことの出來ない人間の心の大切なあらはれであるであらう。しかしかれは何方かと言へばさういふ風でなかつた。もう少しエゴイスタックであつた。かれはよくかう思つて慨嘆した。

『子供なんて何うにもならないものだ。自分の心の苦しみなどはとてもわかつて

貰へないものだ……別々だ。全く別々だ』

しかし時にはさういふ考へ方の無理であるのを責めて、

『何うしてお前はさういふ風に別々に考へるのだ。何故もう少し雜り合つてやらないのだ。何故世間の多くの人々たちのやうに子供を自分の偶像にしないのだ。それはお前の藝術のためか。藝術に専念してゐるためにそれが出來ないといふのか。それは決して好い考へではない』

かう何處かで心の中に叫んでまはる聲がした。否、その心の聲に促されて子供の方へじつと心に向けて見ることもないではなかつた。現にかれは子供を旅に伴れて行つて見たこともある。物を教へようといふ心持になつて見たこともある。女の子などにはよく國語などを教へてやつた。しかし結局はやつぱり別な存在であるといふことに歸した。集立の出來る時まで保護してやるだけのものといふことに歸した。かれにはそれが悲しかつた。しかし止むを得なかつた。しかしさう

いふ風に一つの存在ではあつても、それでも幼い間はなつかまだ何でもなかつた。かれの心の邪魔にはならなかつた。ところが、年を経るにつれて、物心がついて来るにつれて、むしろその存在がはつきりとして来るのにつれて、次第に微妙にそれがかれの心に反映して来るやうになつた。

六八

だから數年前——震災前の心持に比べては、其の存在がかうも氣に懸つて來るかといふやうにかれに深い影響を與へるやうになつた。以前は子供たちは子供たちで勝手にさせて置けば好かつた。不自由さへないやうにして置けば好かつた。學校にやつて置けば好かつた。しかし此ごろではかれ等もはや昔のやうではなかつた。手も足も伸びた。髪などを長くした。わるく着物のことなども氣にするやうになつた。それはお銀が言つたやうに、まさかにかれの書齋の中まで入

つて來て、父親の心の祕密までも嗅ぎ附けようとはしないまでも、その態度や行爲がわるく無氣味にかれに感じられるやうになつた。従つてかれはそれをその身の少年時代に引較べて、萬一を慮つて、その机のあたりの本箱や書棚などを綺麗にして置いた。變な手紙や性慾的な小説などは、皆なちよつとはわからないやうなところに奥深く藏つて置いた。またかれの書いたものにしても、狭斜いろまを材料にしたり女を描寫したりしたやうなものは、つとめて書棚のかけの方に押しかくして置くやうにした。子供がさうなつて行くのは不可抗力であつた。また、つとめてそんなものに影響されずに、昔のやうに自由に快活に且つ單獨に振舞はうと思つても、それは駄目だつた。やつぱり氣を置かずにはゐられなかつた。

従つて子供といふものは、その親を常に老境に入れよう入れようとしてゐるやうなものだつた。更に言ひ換へれば、子供の大きくなつて行くといふことは、その親に一度通つて來た人生を更にもう一度客觀的に通らせて見せようといふやう

なものだつた。親は子の存在の中に再びその身の存在を發見した。従つてどんな父親でも、そのために昔のやうに無自覺ではゐられなくなるのが例であるらしいかつた。かれは昔の同年輩の友だちといつかこんな話をしたことをくり返した。

『何うも子供といふやつが大きくなつて來るのは變な氣がするものだね。無氣味だね。自分の姿をはつきりと鏡にうつして見たやうな氣がするね』

と、その友だちは、此方にあてつけるといふほどではないが、『本當だね、わるいことが出來なくなるね』と言つて、暗示を含ませた靜かな調子でじつと笑ひながら、かれの顔を見た。

『厄介なもんだな』

『何うもしやうがないね。さういふものなんだから』

友だちは靜かに言つた。

『何しろ、もう立派なひとりの男になつて、ひげなどが生えて來てゐるんだから』

ね。女なんか見てもきまりがわるいんだからな。すぐ眞赤になつて了ふんだからね』

『それは當り前だよ、君。もう二十三になるんだらう。考へて見たまひ。君だつて、その時分には随分色氣たつぶりだつたぢやないか。ハイネの詩なんかを讀んでオオ君よ！ とか何とか言つて、大さわぎをしてゐたぢやないか』

『まア、それはさうだね……。親子なんて變なものだな。もう少し區別をつけて置いたら好ささうなもんだがな』

『區別ツて何う？』

友だちはかれを見て問うた。

六九

『別に何でもないけれどもね。何うも雜り合つて來て困るからサ』

島田は其時さう言つて笑つた。

『うむ。さういふ意味か？ それはさうだね……。何うも放つて置くわけには行かんね？』

『だから言ふんだよ。これが女房ならいくら雜り合つて來ても、すぐそれを振り拂つて了ふことも出来るけれども、子供にはそれが出来んからね……。さういふ形から言ふと、女房よりもつと重い形になつてゐるんだね？』

『それはさうかも知れないね。女房と亭主との關係は、別なものを二つ合せた形だけれども、子供と親との關係は此方から生み出した形になつてゐるからね……。』
『本當だよ。それを言ふのだよ。だから子供がなくては、本當の家庭を成したと言へないと云ふのは、そこを言つてゐるんだね。女房となら、いけなければいつでも相談づくで離れられるんだから……。』

『でも君なんかはぜい澤だよ。子供でも、細君でも理想的に行つてゐるぢやない

か？』

『さう見えるかな』

その時から言つてかれは微かにそれを否定したことを思ひ出した。

『子供はまアそれで好いとして、女房は何うだね？』

友だちはまた話をそつちへと持つて行つた。

『女房は子供とは違つて、兎に角同位置に置かれてあるものだからね。何うにでもなだめておくことも出来るし、また理解して貰へば理解して貰ふことが出来るからね。そこが樂だよ。子供のやうに、死んでからでなくては理解して貰へないものとは餘程違ふからね？』

『さうかな』

友だちは首を傾けて、『そこが、君の細君の理想的なところではないかな？ 一概にさう言つて了ふことは出来ないのかな？』

『いや、女房といふものは、さういふものだと思ふな。子供には我儘は言へないが、女房にはいくらでも我儘も言へるし、おどしもきくやうなものではないかしら?』

『さうでない人もかなり多くあるやうだな?』

『それはさういふ女もあるかも知れない。何ぞと云ふと、すぐヒステリイを起したり、結局離縁も出来なくせに家出をしたりするものもあるけれども、それでも、女房は亭主のことを一番多く考へて我儘を通して呉れるよ。さういふ形から言ふと、女房は難有いと思ふことがあるよ……』

『やつぱり君の相手が好いといふことなんだ!』

『まア、さうなら、さうして置いても好いが不思議なもんだな、人間の心といふものは……。いろ／＼なことをも——夫の罪惡をも許して大目に見て呉れるのはやつぱり女房だな……。だから女房には氣なんか置いてやしないよ。何んなに腹

を立てられても、許して貰へるからね……。それから比べると、子供は厄介だ、何にも言はなくても、此方で氣を置かなければならないからね』

七〇

かれは子供たちに知られることを非常に恐れた。かれはあとをつけられはしないかと思つて、家を出て少し此方に來たところで、いつも後を振返つた。

何うかすると、電車でひよつくり常太に出會した。

『何處に行つたの?』

『ちよつと……』

『小石川?』

いつもそつちの社の方に用事があつてかれが出かけて行くのを常太は知つてゐるのだつた。

『うむ』

かれはつとめて軽く點頭いて、

『今歸るところだね?』

『さう……』

『今日は何だえ? ドラマの時間ぢやなかつたのか?』

『さう……』

『K先生は來なかつたのかえ?』

『さう、それで二時間早く歸つて來た……』

それより他には別に何も言はずに、一停留場か二停留場通り越してから、『僕、ちよつと友だちの許に寄つて行く約束をしましたから……』かう言つてすたすた下りて行つた。

また、ある時は好加減時間を置いて、もうゐない時分と思つて、あとから出か

けて行つたのに、まだそこに、そのプラットホームにその背の高い詰襟姿を見せて常太は立つてゐるのだつた。

島田はいくらかどきまぎしたがそんな様子は顔にも見せず、傍に寄つて行つて、

『何うしたの? 電車が來ないの?』

『……』

常太は體の態度だけでそれに答へて、プラットホームの縁のところに行つて、電車の來る方を覗いて見るやうにした。

『何うかしたのかしら?』

『別になんでもないんだらう? 少し遅れたんだ』

果して暫くすると高い響を立て、電車はやつて來た。朝なのと二十分ほど來なかつたのとで、乗るには乗つても電車は一杯で身動きも出來ないくらゐだつた。

で、その次の停留場までは、その常太の姿が、人込の中にずつと離れてその顔と帽子とを見せてゐたが、その次の停留場に來た時には、そこで下りて了つたものか、もはやその姿をそこに見出すことが出来なかつた。いつも下りる筈になつてゐる停留場でも、もしや人込にまぎれてゐたのではあるまいかと思つて仔細にあたりを見廻したけれども、やつぱりそこから下りたやうな様子はなかつた。何となく島田にはそれが氣になつた。常太は皆な自分のことを知つてゐるのではないか。知つてゐながら知らぬ顔をしてゐるのではないか。それでこつそり父親のあとをつける氣か何かで、ひよつくり姿をかくして了つたのではないか。かう思ふと、それからそれへとつまらぬことが考へられて、何となく油斷が出来ないやうな氣持になつた。

それにその日はわるくその身が顧みられるやうな氣持だつた。いつものやうに、(だつてしやうがない。これは俺の生きて行く途なのだ……)。かうでなくては

生きて行かれないのだ……。第三者の知つてゐることではない(と言ふやうに、それを元氣よく追つ拂つて了ふことが出来なかつた。かれは吊革にぶら下がりながらぼんやりとそんなことを考へ込んだ。

七一

子供に知られることの厭なのは、やつぱり親としての威嚴を失ふといふ形もあるにはあるが、それ以上に子供のためにならないといふことがその理由の八分通りを占めてゐるやうだつた。そこに親としての愛が籠められてあつた。島田は妻の代りに今度は子供たちがお銀の對者になつて來てゐることを感じた。

それは打壞しになれば、そんなことは些細なことであるかも知れない。妻がこの問題に觸れて來た時と同じやうに、『だつてしやうがない。俺は俺だ。俺は俺の生きる途を生きて行くだけだ。それがいけなければ何うにでもするより他爲方が

ない。俺には俺の生活が一番大切なのだから……』かう言つてそれを一蹴して了ふに違ひない。しかしその一蹴をかれはやりたくなかつたのである。子供だけにはやりたくないものである。何故なら、子供は妻と違つてすぐそれを誤解したりしてしまふからである。否、誤解しないまでも悪影響をそれに與へて、かれ等の心を不良にするおそれがあると思ふからである。かれはさうしたことを子供に知らせたくなかつた。大きくなつてひとり手に知れて来るまで知らせたくなかつた。つまり第三者には何んな風に噂されても差支ないが——また、妻にもそれを問題にされても止むを得ないが、子供だけには何うかしてそれをそつとして置きたいと思つたのであつた。それだけ子供達の存在が、かれ等の戀愛生活——長い間何者にも犯されず、また何事にも壊されずにやつて來たかれ等の戀愛生活の上に一種の強い影響を與へる形となつた。

かれはそこに行つて、ぶつつかつていつも烈しく頭を振つた。

かれはよく後を振り返つて見たりあたりを注意深く見廻したりした。ひよつとかしてそこに常太の姿を發見しはしないかといふことをかれは常に恐れた。あの大學帽は常太ではないか。あそこに半身出して此方を覗くやうに見てゐるのは常太ではないか。あの店の向うを歩いてゐるのは？ あそこに立つてゐるのは？ 島田はその身の餘りに神経質なのに呆れながら——またそんなことがあつてたまるものかと打消しながら、しかもその心づかひをやめることは出來ないのだつた。かれはいつもの停留場で下りて、その草の緑の深い廣場を横ぎつて了ふまでもその常太の姿から離れて來ることが出來なかつた。

否、お銀の家に入つて行く路の角のところでも、きまつて一度は振り返つて、あとから誰かついて來はしないかといふことをたしかめた。否、いつものやうにお銀の家の長火鉢の前に坐つてゐても、そこから見えるガラス窓の向うのかなめ垣の上にそれとなくひとつの大學帽を見たやうな氣がして、もしや常太がこつそり

来てこつそり覗いてゐるのではないかとびつくりして、慌て、立上つたりなどした。

七二

志摩子にしても、大きくなつて行くにつれて、益々二人の戀愛生活に觸れて行くのだつた。『志摩子向うに行つてお出で……』老いた母親はよくこんなことを言つて孫を睨めた。

『お前、そんなところにまごまごしてゐないで、何處かにあそびにお出でな……。』

父さんがお出でになつた時は、おとなしくしなくつてはダメですよ』

これはお銀だ。

志摩子は子供の鋭感さで、いろいろなことが問題になつて爲方がないらしかつた。何處の家でも、父親は常に内にゐるのに、何うして自分の許だけは他と違ふ

のだらう。何うして父親は時々やつて来て、またぢき歸つて行つてしまふのだらう。それは他所の父親のやうに怖くはないが、何處か馴れ難いところがあるのは何うしてだらう。それに志摩子に取つてことに不思議に感じられることは、ふだんはお銀と抱き合つて、冷めたい手足を押しつけて二階に寝るのがつねであるのに、父親が来る夜に限つてそれが出来ずに、否應なしに下でおばアさんと寝なければならぬことだつた。三日もつゞけて父親が来てゐた時には、志摩子は自分の母親を、たしかに自分だけが持つてゐると信じてゐる母親を、餘所から来る父親に取られて了つたやうな氣がして、朝起きるとから機嫌がわるく、むつつりとして二階の階梯の下ところに棒立に立つてゐたり、また二階から長襦袢姿で、こはれた丸鬚をぐらつかせながら、だらしない恰好で下りて来る母親に縋つて、わるく鼻聲を出してむづかつたり、または不平な感情を露骨にそこに打ちつけたりするので、しまひにはお銀を怒らせて、びしやりと頬を打たれて、朝からわつ

と泣聲を立てたりした。

『ほんたうにしやうがないやつだ、泣くなら泣け!』

かう言つて疝性のお銀は益々腹立たしさうにビシャビシャ打つた。志摩子は烈しく聲を擧げて泣き出した。

勝手へと下りて来て楊枝をつかつて立つてゐた島田は、それを聞くと、慌てて其方へ飛んで行つてそれをとめた。

『まアよせ! よせ!』

『だつて、此兒しやうがないんですもの……。ひねくれやで不良で、しやうがないんですから……。』志摩子が烈しく泣くのもかまはずビシャビシャとつゞけさまに打つて、『放つておいて下さいよ……。父さんが来ると、きまつて、かうして泣いて見せるんだから。朝からぐづつて、ちつとも機嫌をよくしてゐないんだから!』

『まア、よせ! よせ!』

かれはお銀の手を押へて、そこに棒立に立つてゐる志摩子をかばつた。

『本常に折檻させて下さいよ。さうでないと、くせになりますから。これほど母さんが一生懸命になつてそだてゝゐるのに……。それなのにかう我儘で、ひねくれてゐるんですから……。』お銀は島田の手を拂ひ退けて、『何が不足なんだよ。何が不足で朝つばらからそんな顔をしてゐるんだよ。え、お前、父さんが来ると、いつでもさうなんだから……。』さもなくやしさに堪へられないといふやうに頬を打つた。『まア、止せつたら!』

島田はまたその中に割つて入つた。

七三

さらした折檻はかれの體にも當てられてゐるやうに感じられた。

『父さん、留めないで下さい。かういふ不貞腐は放つて置くとかくせになりますから……』かう言つてお銀はいつもの痲癩に墜ちたやうに、眼を吊り上げてビシヤビシヤと志摩子を亂打した。志摩子はたうとうそこに倒れて、近所にもきこえずには置かないやうな高い悲鳴を擧げた。

『もうよせ、といふのに——』爲方なしに烏田はお銀の腕を強く引張つて無理やりに此方へと連れて來た。

お銀はいつも腹の立つ時にするやうに、眼の据わつた昂奮した顔をして、長火鉢のところに来て坐つたが、『本當にふてくされなんですから……』と言つてそこにあつた煙管を取上げた。かの女はスウスウ呼吸を切らしてゐた。

『お前はぢきあゝなつて了ふからダメだよ』

と、お銀はいきなり、やつあたりし、

『だつて、私がするより他にしやうがないんですもの……。家の人は皆なのんき

に見てゐるんですもの……。おつかさんなんか、とめにさへ來やしないんだもの』その言葉の中には、(旦那が來てゐる時に子供をだまして置いてくれるぐらゐあたり前なのに、平生はのんきに、何の用もなしにあそんでゐるくせに——)さうした調子のはつきりと汲み取られてきかれた。

『だつて、私の手にはとても何うにもならないんだもの』

勝手に釜を下してゐた母親は、それをきいて振返るやうにして言つた。

『でも、だまつて見てゐなくつたつて好いちやないの？ とめにくらゐ、來て呉れたつて罰はあたらないことよ。私だつて、子供を打ちたくなんかありやしませんよ。おとつさんだつてさうだ……。』

『……』

瀬戸の丸い火鉢の前に坐つてゐた父親は、何か言ひたさうにして口を曲げるやうにしたが、その身が口を出すと、事が大きくなるのを知つてゐるので、そのま

まむつつりと黙つた。

『まア、好いぢやないか』

傍から島田がなだめた。

『本當に家の人つたらそれや役に立たないんですからねえ。皆なわたしがしなけりやならないんですからね。志摩子の世話ぐらゐ、おぢいちゃんやおばアさんがして呉れなくつちやしやうがないぢやないの？』

『あの子の不貞靡れは、私などの手には終へないからね……』

ぶつゝけるやうに母親は言つた。母親のその言葉の中にも島田はその身が當てつけられてゐるやうな調子を感じた。

『まア、よせ！ よせ！ 志摩子が不機嫌でふてくされてゐたつて、放つて置けば好いぢやないか。取り上げるからわるいんだよ。大人でさへ朝起きて機嫌がわるい時はあるもんだからな……。子供だつて時にはさういふことがあるんだよ』

かう言つて島田は立つて、向うの八疊に泣伏してゐる志摩子の傍に行つて、

『もう泣くんぢやない……。好い兒だ、好い兒だ。……』

それを抱へ起さうとすると、志摩子は急にまた泣き出して、島田などにその身體を弄られるのはいやだ！ と言はぬばかりに手足をぢたばたさせて身悶えした。

七四

さういふ空氣の中でも、かれ等はその長く續いて來た戀愛の心持を變へることも出來なかつた。かれ等は何んなに不自由な思ひをしても、またさういふ風に何んなに子供たちから不思議な壓迫を感じても、それでも依然として一すぢの路の長く前に續いて行つてゐるのを見た。

『子供つて、本當に困るものね』

お銀は笑ひながらこんなことを言つた。

『さうですとも、やきもち見たいなものですとも……。だつて、母さん、何してゐたのなんてきくんですもの……。今でさへかうなんですから、大きくなつたらきつと困るだらうと思ひますね……。』

『さうかね？ そんなことをきくの少し敏感すぎるな』

島田は言つた。

『何うして父さんが来た時には、二階に上つて行つてはいけないんだらうと思ふのね。いつかなんかずつと下から上を不思議さうにして見てゐましたよ。そら京都へ一緒に行つた時にも、わるくさびしさうに不平らしくしてゐたでせう、あれなんか皆さうよ。……。』

『ふだん一緒に寝てゐるからだよ。手を搦んだり足をあつつけたりしてゐるんだらう？』

笑ひながらかれが言ふと、

『それはさうだけでも……。』

『つまりふたりの相手見たいにしてゐるからだね？』

お銀は笑つて、

『だつてそのくらゐのことはしかたがないのね、それがわるけりや始終家にゐて下さ……。』

『わるいとは言ひやしないよ。さういふものだといふだけだよ。自分の本當に生んだ兒でさへ、男の眼からはさういふ風に見えるんだからね……。』

『さうですかね……。本當の子でもさうですかねえ？』
いくらか呆れたといふやうに、

『始めてきいた！』

『やつぱり生きてゐるものだからな。止むを得ないことなんだらう。今でこそそ

んなことは問題にしなくなつてゐるけれども、總領の子供が一人きりの頃には、よくさういふことを考へたものだつたよ。きまつて母親とその子供とは、抱合つて好い心持してぐつすり寝て了ふものだからね』

『しかし、それはさういふこととは違ふんでせう？』

『同じことだよ』

島田はそれに疑問はないといふやうな調子で笑ひながらさつぱりと言つた。すぐつゞけて、

『それに、お前なんかは若い時から、さういふ習慣がついてゐるからね……』

『また、あんな皮肉を言ふ……。そんなことを聞いたんぢやないんですよ……』

お銀は睨めた。

島田は聲高く笑つた。

成程さう言へばそれに違ひはなかつた。冷え性のお銀は、冬は志摩子の暖い肌

なしには眠ることが出来なかつた。かの女はいつもきまつて冷たい足を志摩子の兩足の中に入れた。と、志摩子は半分夢の中で『母さんの足はつめたいわねえ——』と言つて細くその眼を明けた。お銀はそれをたまらなく可愛いといふやうに強く抱きしめて、その柔らかな頬を吸つた。それでもお銀は猶ほ眠れずに、志摩子の肌はその肌を押しつけながら、おそくまで小説などに読み耽つた。

七五

お銀は狭斜いろまちにゐる時分とは全く違つた人だつた。かの女は此頃はわるくこれまでの半生を振返つて見るといふやうな心持になつてゐた。

『何にもわからなかつたんだわねえ』

かう言つてはいつもかの女は溜息をついた。

『本當ねえ……。無茶だつたのね……。よく無事でこゝまでやつて來たものね……』

……』

時にはこんなことをも繰返すやうにした。

昔の情人に伴れられて、海をわたつて、その故郷に行つた話の出た時には、『でも、始終此方のことは考へてゐましたね。とてもこれでは駄目だ。自分の生活が立つて行かない。かういふ風に考へてゐましたね。私は何方かと言へば夢中になつて了ふことの出来ない質たちなんですね……』などとしみじみした調子で言つた。新潟の鐵工所の職工で、ある年の雪の夜にわたしの汽船が沈んで、五百名近くの人たちとその運命を俱にした弟の話などが出て來た時には、

『あれが生きてゐれば、おとつさんやおつかさんはもう少し樂が出來たんでせうけどもね……。今でも残念なことをしたと思ひますよ。やつぱり運がなかつたんですね。そのかはり私が固くなつた……。それは、志摩子のこともありますけどもね、弟の死んだのが、今考へると非常に重く私の身の上に響いて來てゐたんで

すね。かうしてはゐられないと思ひましたからね』などと、その當時をまざまざと浮かべるやうにして言つた。過去の話がそれからそれへと出て來た。

『さう言へば小園さんは何うしたね？』

『あれつきりよ』その言葉の調子の中には、困つてゐる時にはあんなに毎日のやうにやつて來てゐながら、自分の身が固まつて用がなくなると、一月経たうが半年経たうが音沙汰がないといふ語氣がそれとなく含まれてゐた。

『でも、今度は仕合せなんだらう？』

『何うですかねえ』お銀は冷やかに、『あの人の肺病がうつつてゐるかも知れませんね……』

『そしてあの人は何うしたえ？』

『きつともう死んだでせうね』

かう言つたがあとをついで、『いくらあの人がさうする方がお前のためだと言つ

て呉れたつて、私にはあんなことは出来ませんね。やつぱり本當に思つたつて言ふんぢやないんですね……』

『やつぱり質だね……』

『だから、くつつく時だつて簡単なのね、別にあと先きを考へてやつたことぢやないんですもの……出来心よ。でなくつちや、それをほつたらかして、お嫁に行くなんていふことは出来る筈がないんですもの……』

『それはさうだね』

『今になつて見て、あの人の心がよくわかるわ』

小園と言ふのは、お銀が狭斜にゐる時にちよいと知つてゐた藝者だつた。お銀はそれに震災後瀧野川の遊園地か何かで逢つた。それから度々その人は此處にもやつて来るやうになつた。器量はさう好くはなかつたけれども、言葉は丁寧で、何處かやさしいしとやかなところのある人だつた。島田も二三度は逢つて知つてゐ

た。

小園はつい此間まで、その戀のために泣いたり悶えたりしてゐたのであつた。

七六

『今度嫁いて行つた向うの男をお前見たことがあるのかえ』

『それはあるわ』

『見込がありさうなのかえ?』

『見込があるもないもないわ。田舎なまりの眞黒な男ですもの……。それは堅いには堅いらしいけれど、サイダー一本奢るのにも考へ考へ奢るやうな人ださうですから……』

『そんなところによく行つたものだね?』

『まだ、何か私たちの知らないわけがあるかも知れない……』

『何う？』

『あゝいふ人の心の底はわかりやしませんよ。さうね。貞操がないといふよりも性根がないといふ方が好いのね。わるい人ぢやないんだけども、すぐぐらついで了ふのね？ あとさきのことなんか考へないのね……。あの肺病の人と出来た時のことだつて始めはその小園さんの不仕合に同情してちよいちよいやつて来たやうなその男を、そら、ちよつとの間に自分のものにしちやつたやうな人ですからねえ』

何でもその話では、小園はその男のあまりに親切なのについほだされて、向うでは女房子供もあつたりするやうな人であるのを知りながら——また、かの女を別に思つてゐるわけでも何でもないので知つてゐながら、ある夜七歳になる男の兒を伴つてあそびに来てゐて、ついおそくなつて、一晚とまつて行かうとしたのを、『泊るんなら、ひとりでいらつしやいな！』とつい戯談のやうに言つたので、

それから男が忽ち繁々とやつて来るやうになつたのだといふことだつた。小園は夫に捨てられてから、何うしても一人立にならなければならぬと言つて、ミンなどを習つて、他の二階二間を借りてゐたのだつた。その時分、お銀は非常に懇意にして、よく志摩子などを伴つて遊びに行つたのだつた。従つてその時分には小園に對して決して今のやうにつめたい批評がましい口をきかなかつた。

否、一時はその肺病の男と小園との戀愛が深くお銀の心を惹いた。その爲いろいろと力を添へるやうにしてやつたりなどした。『不仕合な人ねえ！ お上さんの前でももしやそれが知れたら大變！』だと言つてひやかしてゐるやうな人ですからねえ』などと言つた。またある時は、『その上さんがもう知つてゐるらしいんですつて？』此頃、病氣をたづねていつても好い顔をしないんですつて……。この間なんか口もきかないんですつて……。私、本當につらいんです……。ツて小園さんしみじみ言つてゐましたよ……。』などと話した。ところが、男がたうとうどつ

と寝ついて了ふと、貰つてゐた金も來なくなる。ミシンだけでは朝から晩まで一生懸命に働いても食へなくなる。それで話し合ひで、此際何處かへかたづくといふことになつてその口をさがし出した。初めはお銀も一緒になつてさがしてやつたりしてゐたのだが、それがきまつていよいよ嫁いて行つたとなると、小園に對するお銀の心持はすつかり變つて行つて了つた。『人間ツて、さういふもんですかね。やつぱり今になつて考へて見ると、いくらかでもお金を貢いで貰ふために、さういふ關係になつただけぢやないの？ そのお金が出せなくなつたから、それで男は捨てられただけよ。ちつとも何でもありやしないわ』お銀はかう投げつけるやうに言つた。

七七

『そればかりではなかつたんだらうけれども……』島田が言ふと、

『だつて今になつて見れば、それがはつきりわかるわよ。人間といふものはその本當のことが、何處でわかるかわからないやうなものね。私だつて初めはさう思つてゐはしなかつたわ。可哀相な人だと思つてゐたわ。だから私親身のつもりで相談にも乗つたし、世話もしてやつたのよ。ところが何う？ 肺病の、もういつ死ぬかわからぬやうな男を捨て、いくらその男がその方が好いと言つて賛成したからと言つて、平氣で、あと足で砂をかけるやうにしておよめに行つて了つたんですからね……』

『でも、人間のことといふものは、さう理想的には行かないものだよ』
『それはさうよ……。私にだつてそれはわかつてゐるわ。思ふやうには行かないものよ。何と言つたつて人間は生きて行かなければならないものですからね。しかし心持といふものはあると思ふわ。同じおよめに行くにしても、もう少し行きやうがあつたと思ふの……。そんなに望ましいところでもないのに、自分できめ

て、てきばき行つて了つたんですからね。あの時ばかりは、さうかな！ と自分でも悲しく思ひましたもの……』

『やつぱり平凡な人間生活的一幕だつたんだね……。小説にもならなかつたわけだね……』

『つまりさうね』

お銀は笑つた。しかし島田にしては、さうしたかの女の言葉の中にもひとつのさびしさを発見しないわけには行かなかつた。妻になれないもののさびしさがそこにあつた。

『お前もおよめに行きたいんだね？』

笑ひながら島田が言ふと、

『いやなこと……』

『そんなことはないだらう。好い人があつたら、今でもおよめに行きたいと思は

ないことはないだらう？』

『そんなことを考へたのは、もうずつと前のことね……。今ぢや、もうそんなことを考へたこともないわ』

島田には、時には沈みまた時には浮ぶ女心がよくわかつた。それは翳かげつたり晴れたりする日影のやうなものだつた。片時も、同じ状態ではゐられないやうに見えた。しとしと深い露を帯びてゐるやうな時もあれば、わるくガサガサに乾いてゐる時もあつた。翳かげつてゐるかと思ふとすぐ晴れた。海綿のやうに巧みに柔かに相手の心を吸ひ込む時もあれば、ひた濡れに濡れて何うにもならないやうな時もあつた。そしてその細かい心の陰翳が常にその顔や體にあらはれた。何となく不安でゐる時と安心してゐる時との區別が一目見ただけではつきりとわかつた。

『今日はお前何うかしてゐるね？』

『さう——』

こんな言葉がかれ等の間には常に取替はされた。『今日もおつかさんと一日口を利かなかつた!』何うしてかといふと、別に理由も何もないのだつた。また口争ひなどをしたのでもなかつた。『人間ッて厄介なものね。自分にだつて、何うしてさういふ気分になるんだかちつともわからないんですからね』何の事はない。空気が日影の加減で開いたり閉ぢたりする合歡の花のやうなものだつた。

七八

垣の枳殻の新芽が柔かに、幟が頭の上ではたばたするやうな、五月の静かな日の午前だつた。島田は郊外の小さな停留場を下りて、或る中等教育の學校の塀に添つて歩いて行つた。

果してそこに廣場があつて、それを真直につきぬけて行くことが出来るやうになつてゐた。馬ごやしなどが緑の草の中に白く澤山に咲いてゐて、その向うには

さゝやかな水の流れる音がしてゐた。

かれは爽やかな静かな心持でそこにかけてある小さな橋を渡つて行つた。

かれは袂からかねて書いて置いて置いた地圖を出して見た。

成ほどそこに小さな町があつた。それは郊外が發展するにつれて、そこに住んでゐる人達の要求に應ずるために出来たやうなもので、肴屋があつたり鮪屋があつたり八百屋があつたりするけれども、それもほんのかたばかりで、まだ建築しかけてゐる二階屋などもその中に雜つてゐるのだつた。

ちよつとした意氣な上さんの坐つてゐるたばこ屋などもあつた。新たにごろ石を入れた道は、つい此間まで麥島か何かであつたらしく、わるく凸凹して、雨の降つた日などさを歩きにくいだらうと思はれた。

『町を少し右に行くと、かどに建具をつくつてゐる家があります……』成ほどこれだな! この角から曲るんだな! こんなことを思ひながら、その家のあるじ

らしい男が頻りにかんなで板を削つてゐるところを右へと取つて行つた。

長い路がその前にひらけた。何でもそれから少し行くと、ずつと向うに、一軒わら葺の家があつて、それが行つても行つても見えてゐるといふ話であつたが、まだその家はつきりとそこにあらはれて來てゐなかつた。左側はずつと此方まで新建の家が續いて、一軒おきぐらゐに人が住んでゐた。が右側はすつかり野原で、その向うの方にはまだ竹藪などが残つてゐた。

かれは静かな心持でゆつたりゆつたり歩いて行つた。

果して少し行くと——眞直だと思つた道もいくらかは曲つてゐると見えて、いつ見え出して來たともなく、そのわら葺らしい屋根が——何でもそれは此處等の地主の家ださうだが、その尖つたやうな屋根が見え出して、お銀が言つたやうに、行つても行つてもそれが眼の前から去らなかつた。次第にあたりは野になつて行つた。馬ごやしの白い花ばかりではなく、薊などもいくらか赤い花のつぼみ

を出し始めてゐた。日はうららかにさして、さゝやかな風が竹藪の細かい葉を動かした。その向うには、村から村へと通ずる一條の往還があるらしく、車の通る音などが静かにきこえてゐた。

停留場が近くに出来るにつれて、こゝらまでも地面の買手や借手がやつて來るので、いつでも望みに應ずるために、竹藪を伐り拂つて、平に空地になつてゐるやうなところが長く續いた。『歩きにくいところよ。餘所見なんかしてゐると、すぐ竹の根つこにけつまづくやうなところよ。でも、そこまで行けば、もうぢきね……。そのわら葺の家が近く近くなつて、その窓が白く見えるやうになつた時分、右の方を見て御覽なさい。そこにぼつとり家が一軒立つてゐます……。しかし、その家だと思つてはダメよ』かうお銀が言つた、あたらしい空氣に段々近寄つて行くのだつた。

一番先にかれの眼に附いたのはその一軒家から少し傍に外れたところにもう一軒玩弄具のやうな文化式の家があつて、そこに小さな窓が此方を向いて開かれてあることだつた。半ばまくられてある白いカーテン。その前庭を赤く白く彩つてゐる草花。その横にくつつくやうになつて見えてゐる井戸。ふとその窓を子供の影が掠めたと思ふと、今度は志摩子の髪をおかつばにして洋服を着た姿がはつきりとそこに見えた。

『オイ!』

かれは呼んで見た。

しかしそれはきこえなかつた。内では子供達が何かいたづらでもしてゐるらしく、志摩子の姿は入つては出、出ては入つた。

『オイ』

いくらか聲を高くして鳥田が再び呼んだ。

と、今度はきこえて、窓に半身を出してゐる志摩子は、ひよいとこつちを見て、そこにかれが立つてゐるのに目を留めて『あ!』とか何とか言つたらしかつたが、すぐお銀の妹の女の兒の顔が二つまでずらりとそこに並んで、つづいてお銀の白いにこにこした顔があらはれた。

『おあい!』

『父さん……』

『お父さん!』

などといふ聲が異口同音にそこからおくられた。喜久子は手を合せてラツパのやうにした。一番幼い、今年五つになるかね子は小さい手を高く舉げた。

かれ等の距離はまだそれほど近くなかつた。鳥田は竹の切株のところどころに

残つてゐる間を拾ふやうにして歩いて小さな溝を跨いで、やつとその入口のところへ行つた。

『さア、お父さんが来た!』

と言つて一番先きに志摩子がそこに顔を出した。つゞいてこの家の主婦でお銀の妹であるお糸が大きな丸髷に結つた顔を出して、

『をぢさん、ようこそ!』

と言つて丁寧に時儀をした。

『好いところですね』

『いゝえ』

三間しかない、入つたところにある六疊の長火鉢の前へと、かれを案内しながら、

『をぢさん、ちよつとわかりにくかつたでせう?』

『いや、すぐわかつたよ』そこにゐるお銀に、『早かつたぢやないか? もう、さつき来たの?』

『ええ、私は、ずつと前に——』

『早いね……』

『早いでせう。だつてけさ四時起をしてやつて来たんですもの……』

志摩子がくすくす笑つてゐるのを島田は眼にとめて、

『うそだらう?』

『うそぢやないわ。志摩子にきいてごらんなさいな!』

益々志摩子は笑ひ出した。

『うそだ、うそだ、昨日から来てゐるんだ?』

『だめよ、お前は!』お銀は志摩子の方を見て、『父さんをおかついでやらうと思つたのに、お前が笑ふんだもの!』

『だつて……』

志摩子はアハハと笑つて、跳り上るやうにして、子供たちと一緒にそとの方へ
と行つた。

八〇

『昨夜おそくお糸と一緒に来たんですよ』

『さうだらうと思つた……。お前にしては早すぎるもの……。僕だつて、お前が
先きに來てるなんて思はなかつたもの。志摩子の姿が見えた時だつて、ひとり
やつて來てるのだらうと思つたもの……。』

『でも、すぐわかりましたか？』

『ちつとも間違はなかつたよ。たゞ建具屋のところから此處まで來る間が馬鹿に
長かつた……。』

『さうね、あそこが長いわね……。』お銀は窓の方を見るやうにして、『でも好いと
ころでせう。静かで……。』

『さうだね』

『今朝起きたときなんか、生返つたやうな氣がしましたよ。霧が下りてゐまして
ね。茫としてゐるんですもの……。好い氣持つたらなかつたわ。……かういふと
ころに住んでゐると、長生きが出來ますね……。』町の中にしか住んでゐないお銀
に取つては、かうした田舎は何も彼もめづらしく見えるのだつた。かの女は、今
朝はいつもに似ず五時に起きて、志摩子を伴れて、向うの方まで行つて見た話な
どをした。

『まだ向うの方は、皆な百姓が住んでゐるのね……。竹藪なんか澤山澤山あります
よ。竹の子だつて、路ばたにによきによき出てゐて、一本や二本取つて來たつ
て、人は何とも言ひやしませんからね……。そら、そこにあるでせう？』

餉臺ちんぎだいの上に長けた細い竹の子が五六本置いてあるのを島田は見た。

『でも、見てゐれば、何とか言ふだらう？』

『それは中に入つて取ればね、何とか言ふでせうけれども、路ばたに出てゐるんですもの……。のんきなものよ……』

勝手の方で湯を沸かしてゐた妹のお糸は茶を入れてそこに持つて来たが、

『をぢさん、まだ本當に御挨拶もいたしませんで……。よくお出でくださいました』茶を出す前に、かう言つてもう一度丁寧にお時儀をした。

『いゝところですね』

『うゝえ……』

家の狭いのをいくらかきまりがわるがるやうにしてお糸は言つた。

『しかし、夜なんかさみしくはありませんか——』

『でも、お隣が御座いますから、それほどでもありませんの……。それに、家に

も早く歸つて来て貰ひますから』

『何時に歸つて来るんです？ 旦那さんは？』

『五時にはきまつて歸つて来るさうですよ』傍からお銀が口を挿れて、『その時刻になると、子供等が皆なこの窓のところを竝んで見てゐるんですつて。そして向うからその姿が見えると、手をあげたり聲を立てたりしてそれは大さわぎなんですつて……。理想的な家庭よ』

かう言つたが、いくらかひやかすやうに、

『そら、郊外の停留場なんかには、時間になると、子供を負つて、旦那さまを迎へに出てゐる若い細君があるでせう。つまりあれをやつてゐるのよ……。好いわねえ、平和で。何一つ不平はないんだから——』

『本當だね……。旦那さまのやさしいのが何よりだね……』

『こゝのはやさしいぐらゐぢやないんですよ、友だち見たいに二人して遊んでゐ

るやうなもんですからね』

八一

また例の半生の不仕合がお銀の胸に浮かんで來るのが、それと島田にもわかつた。

しかしかれはそれに成るだけ觸らないやうに、

『仲の好いのが何よりだね』

『それはさうね。何んな貧しい生計でも、かうして楽しく暮らして行けますからね……』

かの女の艱難がそれとなくその言葉の中にこめられてあるのを島田は感じた。

『二人とも無邪氣なもんですからね。三人の子持だなどとは少しも思へませんからね……』

『だから好いんだよ』

『やつぱり氣質ですかね。お糸はあゝいふ社會の中に育つても、さういふ空氣の影響なんか少しも受けませんでしたからね……』

『さうだつたね』

『丸でいかつい女學生だつたんですもの……それに、新ちゃんだつて固いんですからね……。だから、私、妹たちを見ると、これだけは私の爲事だつていふ氣がするんですの……』

『本當だよ』

『先生も知つてゐるけども、二人が結婚する時には、母おつかさんはあまり望んでゐなかつたんですからね。私が進んで一緒にさせたんですからね……。だからかうしてむつましくやつてるのを見ると何より氣持が好いんです……』

島田は點頭いて見せたが、すぐ話をお糸の夫の方へと持つて行つて、

『それでも無事でつとめてゐるんだから好いね……』

『それはまだ若い人ですからね。好いつて言ふわけには行きませんがね……。世の中つていふものは、やつぱり階段ですから、さう初めからうまく行きやしませんよ。まあ、段々築き上げて行くより外爲方がないですね……』

お銀はしみじみと言つた。お銀の胸には自分の通つて来た道がまたしても浮かんで来るのだつた。かの女は十六の時田舎に行つた時のことなどを思ひ出してゐた。

『でも、その時は別につらいとも何とも思つてゐなかつたんですね……。親たちが困つてゐるのを見るのがいやで、進んで行く氣になつたんですね。それも今考へて見ると、何にもわかつてゐないから出来たのね。別にさういふ社會に入ることもなんか恥かしいと思つてゐなかつたんですね……。まあ、しかし、昔のことは昔よ。今更そんなことをくり返さなくつたつて好いよ。……たゞ、かうい

ふところまで、どうやらかうやらやつて来たといふことが振返られるのよ。これといふのも先生のお蔭で……』お銀の眼からは涙が出かゝつて來てゐた。

『そんなことはないけれど……』

『だから、それがうれしいのよ。……お糸だつてさうでせう。ね、お前……。お前だつて、間接には、先生といふ人があつたがために、小さいながらもかうして家庭をつくつて行くことが出来たんですね……。だから御馳走なんて、こんな田舎だからとても出来はしないけれども、それでも記念に來ていたゞきたいッてお糸も言ひますからね。その志を買つていただくのよ』
たまらなくなつたといふやうに、右の手を顔に當てた。

八二

遠く昔が思ひ出されるやうな日だつた。窓から見ると、向うの草叢近くに志摩

子たちが遊んでゐて、竹藪に添つた道を田舎の百姓が二三人何か話しながら通つて行くのが見えた。竹の緑が袖でも垂れたやうに静かに靡いてゐた。

お糸に島田が初めて逢つた時のことなどが話の中に出て來た時には、かれ等はその時分のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。その時、お銀の父母は、東京でも海に近い町の、寺やら大きな祠やらのある丘の陰のやうなところに住んでゐた。そこを島田は訪ねて行つたのだつた。

『あの時はお糸はまだ十一ぐらゐでしたからね……。そら、あなたに幅の廣いリボンを戴いて、それを喜んで、いつまでも持つてゐましたよ……。』

『まだ、昨日のやうに思ふね』

『そら、その次ぎに池上に行つた時、あの鯨洲の川崎屋に行つて、使でお糸を迎へにやつたことがありますね……。そら、すぐあの隣が水上警察か何かで、女の溺死したのを丁度そこに持つて來たりなどして……。』

『さうだつたね。だらりと髪の毛が白い肌にかゝつてゐるのが見えたりしたね……。そら、お糸さんが立つて行つて、あの柱のところ凭りかゝつて、長いこと見てゐたのを、お前が、お糸、もうそんなものを見るんぢやないよと言つて此方につれて來たぢやないか。……。』

『あ、をぢさん、よく覚えていらつしやいますね。さうでしたね、本當に……。』
煮物か何かしてゐたお糸は、勝手から顔を此方へ出すやうにして言つた。

『さうさう……。あなたは覚えが好いのね……。』

『それからそら、あの時、何か忘れて、あとでお前が送つて呉れたぢやないか？』
『さうでしたね。時計か何かでしたかね……。？ 忘れちやつた……。』

『随分、昔ですね』お糸もそこに來て、半分勝手の方を見ながら坐つた。

その時分のことか姉妹にもなつかしくいろいろと思ひ出されるらしかつた。その裏の丘の上の話や祠の話や、細い通りに住んだ人たちの話などがそれからそれ

へと盡きずに出て行つた。『私も随分お轉婆だつたのね……。何しろ、あの高い芝草の坂のところを男の兒と一緒に胸を押つけてズルズル這つたんですからね。着物がよごれることなんか何とも思つてゐやしないんだから……。』などとお銀もその時分を思ひ出すやうにして言つた。島田は島田で、初めてそのお銀の家に行つた時のことを思ひ出してゐた。その時かれはかなり多い金を懐にしてその細い通を歩いて行つた。そこでかれはその金をそこでお銀に渡す筈になつてゐたのだつた。しかもかれはそれをそんなに重く考へてはゐなかつた。かうして金をやるといふことは面白いことだらうにしか考へてゐなかつた。藝者などといふものはもつと不真面目な信用の出来ないものだと思つてゐた。それがかうして二十年も續いてお銀の上にもその身の上にもかう年波が積つて行かうとは思ひもかけなかつた。『さうですかね。そんな氣分でしたかね。あなただつて、あの時分はまだ世の中のことなんかわからなかつたんですからね。私だつてさうよ。隨

分おつちよこちよいだつたんですもの……。今、考へるとひや汗が出るやうな氣がしますよ。よくこんなものところまで一緒に來たわね……。』こんな風にお銀は言つた。

八三

『もつと詳しく言つて見ると面白いんだよ……。』

島田は笑ひながら、

『何を？』

『いや、その金のことサ。僕にして見れば、あの時分三百圓ツていふのは、さう小さな金ぢやなかつたからね。惜しいといふやうな氣は少しもなかつたけれども、馬鹿々々しいことをやつてゐるな！』といふ氣はしたんだね。しかしあの時は丁度世間に迎へられた始めて、大分氣が大きくなつてゐたし、さういふ風に金でも

やつて見なければ、花柳界のことなんかわからないといふ氣がしてゐたんだね：
：それに、やつぱりお前が好きだつたんだね……。あのお前たちの家のあつた細
い通から此方へ大通りの方へと出て来る横町があるだらう……。？」

『え、え』

お銀は黙頭いて見せて、『石堀のあるところでせう？』

『さうさう、あそこの人通のないところで、兎に角、お前たちの前で、財布から
金を出して勘定したりしてはをかしいからと思つて、あそこで立留つて、堀に向
つて、財布から紙幣を出して數へたものだ……。ところが、あいにくそれが五圓札
ぢやないか。おまけに落附いて勘定してゐれば好いのに、人の足音がして此方に
來たりなどするので、慌てゝよして、紙幣を手に握つたまゝ歩き出したりして、
今考へると、随分滑稽な氣がする……。』

『あの時、母さんは氣難かしさうな人だねと言ひましたよ』

『それはさうだらう。あゝいふ風に髪を中刈にしてむつつりしてゐたんだからね
……。それでもあの時、いろいろなものを御馳走になつたよ。鰻を御馳走になつ
たと覺えてゐるよ。おつかさんが三味線を出して常盤津の乗合か何かを弾いた
よ』

『さうでしたね』お銀にしてもその時分を思ひ出すといふやうに、『わからないも
のね。あなたと今日までかうして、一緒に話したり何かするとは夢にも思はなか
つたんですものね……。』

さう言へば、あの山王下のある狭い室でお銀に初めて逢つた時のことなどが思
ひ出されて來るのだつた。初めての夜は別にさういふこともせずになゞ顔を見た
だけで綺麗にわかれたが、二度目にたうとうさういふ關係が出来て、それからつ
づけて行つたが、四度目あたりに、ちゃんと覺えてゐるが、その家の階梯を上つ
て、普通は廊下を左に行くのだが、あべこべに右にちよつと入つて、こんなとこ

ろにこんな房ふかがあるかと思はれるやうな、兩方とも壁の、置き床に藤の花の幅のかゝつてゐるところで、(もう、この女もこれだけだ。つまらんな……。よしてはうかな)と思つたことだつた。あの時よしてよして、さういふ女がちよつとこれの一生の長い路を鮎のやうに横ぎつて行つただけで——今ではその顔さへ忘れて了つて、途中で逢つても、いや、電車ですぐ向う側に乗り合せてゐたにしても全く知らずに過ぎて了ふのに相違ないのであつた。

『それを思ふと、不思議だね』

『さう——そんな風に思つた』が、お銀も考へるやうに、『私も、あの房ふかの時のことをよく覚えてゐますよ』

『さうかえ、覚えてゐるかえ?』

それだけで二人はだまつた。暫くしてからお銀は言つた。『やつぱり長い路ね……。時ね……。花火のやうにもえて了ふのは、浅い戀ね……。ちよつとは綺麗で

もすぐ消えてなくなるのね……。』

そこに、お糸は新しい餉臺をひろげてビールなどを持ち出した。

八四

お糸は『をぢさん、こんな田舎ですから、何にもないんですよ』などと言つて、そこにいろ／＼なものを並べた。さし身に鹽焼。一つの皿には大きな鯛がそり反つて、もう一つの方にはきんとんなどが入れられてあつた。

『えらい御馳走だね!』

『いゝえ、何にも出来やしないんです……。』

お糸は震災後あちこちを彷徨してゐたが、兎に角此處にかうして落附き得たといふ喜びと、結婚してから十年になるといふ記念とをかねて、じぶんたちの長く變らない戀愛をも併せて祝福したいといふのであつた。

『そのかはり、をぢさん、もう十年もたつと、もつと立派になりますから、その時は大きな宅でも建てて、もつと本當に御馳走しますから……』

姉よりは肥つてゐるけれども、眼のあたりの氣分がよく似てゐて聲の調子にも何處か同じやうなところのあるお糸は、かう言つてそこに坐つて、にこにこしながら愛想よく徳利を手にした。お銀も傍から、

『何うかあがつて下さい……。お糸の長年の志ださうですから……』

『新ちやんが歸つて来てからにすれば好いの……』

『もう歸つて來ますよ……。五時になりや歸つて來るんですから……』

『さう、それぢや御馳走になるかな!』烏田も心持好ささうに盃を起した。お糸は波々とそれに酒をついだ。

烏田にしても、お銀にしても、のろのろした楽しい氣分になつてゐた。かういふ一日もこの人生にはある。艱難ばかりを経て來たやうな、また傍目も觸らずに

やつて來たやうな人生にも、かういふのんきな一日もある。だから長い一生も生きて行かれるやうなものであつた。お銀にしても十年前とはその心持でもその趣味でも全く變つた。もはやダイヤをその指にはめようとしなければ、無理をして好い着物を着ようとしなかつた。昔は芝居など何うしても、毎月見なければ承知が出來なかつたものであつたが、今では、『芝居もね、いつも同じことでね』などと言つて進んで出かけて行かうとはしなかつた。それよりもかういふ靜かな郊外にでも來て、何の屈託もなしに、一日のんびりとして暮して行く方が何れほどその趣味に適してゐるかも知らないといふ風になつてゐた。

『でも、姉さん、郊外は食物のまづいのが困るわねえ!』

『さうね。私も初めの中は、さう思つたけども……。肴が古くつて一番困つたけれど、この頃では、もう餘程馴れたよ。それやね、時々向うに行つて、旨いものを御馳走になつたりすると昔を思ひ出すけどもね……。もう散々うまいものも食べ

たし、着たいものも着たし、したいこともしたんだから——』

『姉さん、此頃何うしてか、そんなことばかり言ふやうになつたのね……』

お糸は姉の盃にも徳利を持つて行つた。

『私、澤山よ……』

『でも、一盃召上つて下さいよ』

強ひてお糸はついで、『まだ、姉さんなんか、そんなこと言ふのは早いわ』

『本當だな。この頃、馬鹿にあんな風に年寄染みたことを言ふやうになつちやつた——』

傍からかう島田が言ふと、

『だつて、もうおばアさんですもの……』

『姉さんがおばアさんだなんて、そんなことありやしないわ。此間、家によく来る人が私より姉さんの方が若いッて言つてゐたわ』

八五

『父さんが歸つて来た！』

子供達がぞろぞろと家に入つて来た。見ると、新吾が背廣姿で、中折をかぶつて、何か手に持つてにこにこしながら此方へとやつて来るのがそれと窓を框かどにして見えた。島田はお銀に、

『わりに早いね』

『今日は早いんでせう。あなたが來てるから、早く歸つて來るなんて言つてゐたさうですから……』

『それは氣の毒だわね』

『なアに、自分だつて早くしまつて來たいのよ……。それに、忙しけりやダメなんでせうけども、この頃はいくらかひまなんですつて……』

『K組の何をやつてゐるんだえ？ 一體？』島田は始めて妹の夫の携はつてゐる爲事に就いて聞いた。

『何でも購買掛の方か何かやつてゐるんでせう？』

『それぢや忙しいんだね』

『でも、建築や土木の方よりは樂なんでせう。まだ、自分の意見なんか通らないんでせうけども……ね……』

『それは爲方がないサ。さう若い中から自由がきくもんかね。長くやつてゐる中に段々用ゐられるやうになるんだよ』

『それはさうね』

そんなことを話してゐる中に、もう新吾はそこまで來たらしく、子供達が頻りに取絶つて何か言つてゐるのがきこえた。『およしよ、志摩子……。そんなところに乗つてゐては、あぶないよ』志摩子ははつちやけてそこにあるブランコに横つちよ

に乗つたり何かしてゐるらしかつた。格子が明いて、ステッキをたゝきの隅に置く音がしたと想ふと、やがてそこにいくらか顔を赤くした丈の高い新吾の姿があらはれた。

『おや、お歸んなさい』

お糸が立つて行つて迎へた。

新吾はそこに包を置いたが、すぐそのまゝそこに來て、『よく入らつしやいました……』と言つて丁寧にお時儀して、『今日はあついですね……。少しいそいで來たら、すつかり汗になつちやつた。先生、ごめんなさい』かう言つて、向うの六疊の間に行つて、そのまゝ洋服をぬぎにかゝつた。お糸もそつちへと行つた。

志摩子とそのすぐ下になる喜久子とは、そこに置いてあつた父親の持つて來た包をそつと覗いて見たりなどしてゐたが、『あ！』と言つて、好きなものを其處に認めた時の喜びの聲を先づ志摩子が立て、そして兩手を伸して振るはしてそし

て舌を長く出した。

『何してゐるんだい！ お前！』

此方からお銀は笑ひながら、

『だつて、……うまいもの』

志摩子はまた舌を出して手を振つた。此時やつとその何であるかを知つた喜久子は、やつぱりうれしさうにして、一番先きにそれを貰ふべく父親の方へと走つた。末のかね子は自分だけ見後れたのが腹立たしいといふやうに、いくらかべそをかけたといふやうな形で母親に寄添うた。

『何だか、教へて上げませうか』

志摩子は一番大きいだけに、わるくこまちやくれて、鳥田と向き合つて坐つてゐるお銀の耳元に口を寄せるやうにして言つた。

『母さん、當てゝ見ようか？』

『うむ……』

志摩子はお銀の肩に手を當てゝその顔を覗き込んだ。お銀は笑ひながら、

『お柏餅……』

『違ふ……』

志摩子は笑ひながら首を振つた。

八六

『教へませうか？』

『柏餅でなければ……バナ、はもう遅いし、いちご……』

『……』

志摩子はいくらか軽く首を振つただけで、別にそれを否定もせずにならぬので、
『中つたでせう？』とお銀が言ふと、

『うらん……』

と今度は志摩子が頭を振つた。

『中つたよ、いちごだよ……。たしかにさうだよ』

島田はそれと信じたやうに、壓しつけるやうに、

『中らない、中らない……』

志摩子はまた言つた。喜久子も笑つてゐた……。

そこに新吾は出て来て、

『何を言つてゐるんです……。何アんだ、これの當てつこをしてゐるんですか。

中りさうなものだかな』

お銀が押へて、『待つてお出でよ私があてゝ見るから……。ダメよ、言つちや

……』

考へてゐるその母親を肩から覗くやうにして、

『母さん……母さん……』口を曲げた。

『待つてお出でよ』

『び……びですよ』

お銀はそれでやつとわかつたといふやうに、『何だえ！ 枇杷かえ？』

『あはゝ』

と子供達は笑つた。

『枇杷といちごとは姉妹分だからまあ當つたやうなものだね！』

『負惜しみ、母さん、負惜しみ……』

志摩子は指さすやうに、半ば囁すやうに言つた。島田はいくらか赤くなつた顔

に楽しさうな笑ひをたゝへてそれを見てゐた。

『それぢや、それを此方にお出しな』

新吾がその包を持つて出すのをお銀が受取つて、餉臺の空いてゐるところにそ

れをひろげて、

『まあ、これは好い枇杷!』

『好い枇杷でせう。あの角のところで、あんまり見事に積んであつたから、ついひつかゝつて買はせられちやつたんですよ』

お銀はその一つを手を取つて見て、『これなんか百目ぐらゐありさうね』

『房州だな!』かう言つた島田はこの頃あの海近い漁村の裏の丘あたりに、黄ろく熟して一つ一つ袋をかぶせられてゐる枇杷を眼の前に浮べた。

『お糸、お前、ちよつとお盆を持つてお出でな!』

その持つて來た盆に一杯積み上げるほどにしてお銀は盛つて、『さ、皆なにあげるよ』一番初めに志摩子に二個、それから喜久子にもかね子にも同じ數だけやつて、『私も一つ頂戴しよう、今年はまだ初物よ』かう言つてお銀はそれを一つ手に取つて、その薄い皮をむいて、いかにもうまさうにそれを口に當てた。

『さア、先生も……何うぞ……』

新吾は勧めた。

『それぢや、僕も一つ御馳走になるかな、これはうまさうだ!』

その一番大ききさうなのを取つてにこ／＼しながらその皮をむき出した。

そこにお糸は新吾の分の料理を持つて來て並べた。今度はビールの口があけられて、それが二つのコップに波々と注がれた。いつの間にか食つて了つて、まだ足りなさうにしてそこに立つてゐた子供たちは暫く形勢を觀望してゐたが、もう呉れさうにもないので、『外に行かう!』かう志摩子から言ひ出して、そろつておもてへと出て行つた。

八七

酒と言つてもさう長く飲んでゐるのでもなかつた島田はぢき盃を伏せた。

『さう……もう召上らないの？ 随分弱くなつて了ひましたのね……。昔は一升ぐらゐ平氣だつたのに……』などとお銀は言つた。一しきり向うの奥の料理屋の話などが出て來た。時間まではいつちも盃を收めなかつた話なども出て來た。『私、一度、先生のひどく酔つたのを見たことがあるわ。來る女中も來る女中も皆なつかまへてそれに足がらをかけて倒さうとするので、いくらとめてもとまらないで困つたことがあつたわ……』お銀は笑ひながらこんなことを言つた。

『覺えてるよ、やつぱりお前がさうさせたんだよ。一體、僕は酒にかけてはおとなしい方なんだから……』

『それはさうね。好い氣持に酔つた時にはすぐごろりとひて肱まくらをして寢て了ふのね。さうでなければ、大きな聲で萬葉の歌をうたふのね……』

『古い話だな』

『だつて、今だつて酔へば歌ふでせう？』

『この頃は酔つたことなんかないからね……』

『それはさうね』

そこに、勝手に誰かが來て、お糸が立つて行つたと思ふと、すぐもどつて來て、鰻のやいたのを入れた四角な黒く塗つた箱をそこに持つて來て据ゑた。

『これが今日の一番の御馳走なんですつて……』お銀はわきからかう説明した。

『うむ……』

『いゝえ、何うせこんなところですから。をぢさんにはダメでせうけども……』

傍そばからお糸が言ひかけるのをお銀は引つたくるやうにして、

『何でも震災まで下谷か何處かでやつてゐた人なんですと。此間、一番初めに來た時、私、御馳走になつたのよ。まアこれはおいしい。こゝらにこんな鰻があるのツて言つたのよ。私の方なんかにはちよつとこんなのはないわ』

『何でも主人がやいて自分で持つてくるんですけれどもね。震災に逢はなければ』

こんな田舎になんか来やしないなんて言つてゐるんです……。何でもその時にもたれが肝心だつて言ふので、何を捨てゝもそれだけは一生懸命で持ち出したツて言つて威張つてゐるんですから……』

これはお糸だ。

『う、そいつはおもしろいな』烏田はお銀が蓋を取つて小皿にわけてさんしよを振りかけて呉れるのを一箸はさんで食つて見て、『うん、こいつはうまい』

お銀も食つて見て、『今日のは此間よりも大きい故か、あぶらが勝ちすぎてゐるけども、それでもおいしいわ……。ぢや、もう御飯を持つていらつしやいな……』

かう催促されてあたふたとお糸がたき立ての御飯をそこに運んで来た。

『あ、こいつは旨いな。うなぎはたき立ての飯に限る！』

新吾も言つた。

で、一しきり食事が續いた。烏田も愉快さうに、旨さうに箸を運んだ。しかし

それも長くはなかつた。いつかおしまひになつて、茶を飲んだり食後の枇杷を喰つたりしてゐる頃には、緑葉に包まれた静かな長い日もいつか夕暮近くなつて、その光線が斜めに草むらから竹藪へさし添つてゐるのを眼にした。烏田はそつちへと立つて行つて、高窓に腰をかけて、じつとその静かな夕日の影を眺めた。長い人生の中には、かうした楽しい静かな一日もあるといふやうな心持で。

八八

その近所を歩いて見るといふ心持で、二人がおもてへと出て行つたのはそれから暫く経つてからであつた。薄暮になるのにはまだ少し間があつた。子供達は出て来た時、ちよつとの間あとを追つて来たけれども、夕飯だと言つて呼び返されたので、そのまゝもとへと戻つて行つて了つた。

もはや竹むらに残つてゐた夕日もすつかり消えて、風のない日の此頃の静けさ

と言つたやうなものがそれとなくあたりを包んだ。そこに藁葺の屋根がある。小さなかなめの苗をあしらつた四目垣がある。小さくとも郊外に自分の家を構へてせめてそこで一日の安息を求めようとする人たちの住んでゐるやうな、赤い瓦の屋根がある。安もののカアテンをいかにもハイカラらしくあたりに見せて、一目でその内部の貧弱さがそれと想像される離れ風の書齋がある。そしてそれ等の建物は、半ば黄ろくなつた麥畠のところどころに綴るやうに建てられて、そこに若い耳かくしの細君が二人のむつまじさうに並んで歩いて行くのをじつと長い間立つて見てゐた。此處等からは電車のレイルはさう大して近くはない筈なのに、すぐそこを通つてでもゐるやうにはつきりと聞えて來るほどそれほど、静かな夕暮だつた。

『静かねえ！』

『本當だね……。かうなると郊外も好いな……。』

『かういふところに住んでゐたらさびしいでせうかね？』

『さびしいよりも退屈で困りやしないかな……。』

『退屈ぐらゐなら我慢が出来るやうな氣がするけれど……。』

二人はまた黙つて歩いた。竹藪がちよつと間が盡きて、黄熟した麥畠がやゝひろく見わたされるやうなところへと出て行つた。向うの垣の中の百姓家の窓には、もう灯がぼつたりついてゐるのが見えた。向うの道を通つてゐる荷車の響につゞいて、二三人何か話しつつ通つて行く人たちの聲が小さな丘を背景にして微かにきこえた。

かれ等の心はじつと雜り合ひ濃み合つた。それは何の事はない、この夕暮の静けさの中に深く沈んで行くやうなものだつた。勿論それは若い時の張り詰めた戀の感激でもなく、または中年の頃の止むに止まれぬ戀の漲溢でもなく、さうかと言つて互ひに抱き合つたりするやうな心持でもなく——その時にぢかに當つて見

なければわからないといふやうな、さまざまの艱難の光景を経て始めて、さうした境に到達したといふよりは、むしろその時になつても——もうそのやうな戀心が燃えようなどは夢にも誰も思つてゐないやうな今になつても、さうしたひとつの静かな融合がこの二つの性の上に開かれて、今までにはとても想像もつかなかつたやうな静かな喜びをそこに感ずるのだつた。尠くともそれはひとつの戀の段階であらねばならなかつた。二人は立留まつた。深くその空氣に浸つたやうにして立留つた。もはやかれ等は手を握りなどはしなかつた。またそのお互の静かな喜びをそこに表現しようともしなかつた。一つの風の搖ゆき、またひとつの草の葉のゆらめきにも、その静かな心持の亂されて消えて行くことをおそれるやうに、またあわたゞしい世間の空氣がその喜びの中に入つて來るのをおそれるやうにじつとしてそこに立盡した。丘の向うには更に一層ひろびろとした野がひろげられてあるらしく、そこにはばつと薄い五月の霧がジェルのやうにかゝつた。

八九

幾百年前にもやはりさうであつたらうと思はれる遠い遠い丘の靡きの上に一刻ごとに薄れて行く夕焼の空、それもオレンジ色から紅色に變り、またその褪紅色すらも次第に微かに消えて消えて、さうして二人が竝んで立つてゐる中にも、向うの林の黒い影がそれと區別がつかないばかりに薄暮の中に包まれて行つて了ふのだつた。のどかな蛙の聲が湧くやうに遠くできこえた。

『田があるのね？ 向うに——』

お銀は言つた。

『うむ……』

鳥田はしかし容易にその冥想から戻つて來ることが出来なかつた。かれの眼はいつまでも遠い微かな夕焼の空の方へとじつと注がれてゐた。鳥田は昔の友達で

あつたKを思ひ浮べてゐた。もしKが今日まで生きてゐて、一緒にこの静かな夕暮の空に對してゐたとしたら、かれ等は何んなに深い感激を互ひに語り合はせることが出来たであらう。永劫の喜び——静かな自然の中に深く雜り入つた戀の喜び、さういふものを互ひに心ゆくばかり語り合ふことが出来るであらう。續いてかれは若い時に讀み耽つたツルゲネフのセンチメンタルな小説をそこに思ひ浮べた。アアシャなどを思ひ起した。またイリイネなどを思ひ起した。そしてその若さの戀の心持を今のその身の戀に比べて見た。その心の美しさは決して勝るとも劣つてはゐなかつた。それはかれとて昔はやつぱり多勢の若い人たちと同じやうに戀の若さにあくがれ、青春の過ぎ易きに慨き、美しい若々しい戀の再びすべからざるを悲しまぬことはなかつたが、しかも今日から考へると、それは一つの詩人らしい空想で、通つて來て見れば、そんなことは何でもなく、今だに、かうして戀のあつい心が脈々として生きて波打ちつゝあることを思はずにはゐられなかつた。

つた。死にまで戀！ デウスベクト 死床にまでかの女の腕！ かう思ひながらかれはじつとそのひろびろとした薄暮の天地に對した。

『何うしたの？』

餘り黙つて立つてゐるのでお銀は聲をかけた。

『餘り静かだからサ』

『本當ね……』

『こんな静かな晩は、一生の中にも幾度もないだらうと思つてサ』

『本當ね。あの蛙の聲が好いぢやありませんか。町中ではとてもきかれませんか……』

……』

『だから言ふのサ。町中にゐるとたゞ混雜こたかくして何も考へずに過ぎて行つて了ふんだが、人間が生きて行くのも死んで行くのも考へるひまもなく、さつさと通つて行つて了ふんだが、かうしてたまに田舎に出て來ると、人間とか人生とかいふこ

とがつくづく考へられずにはゐられないからね……』

『本當ね……』

お銀もその心持のはけ口を漸くそこに見出したといふやうに、しんから同感したやうな調子で言つた。

『田舎はだから好いな!』

島田は續けて言つた。

もはやあたりはとつぷりと暮れ果て、居た。丘の上の夕焼の色も今では残つてゐるとは言へないくらゐに微かに微かになつて了つた。何處かで勞働者が何かうたつてゐる聲が蛙の鳴聲に雜つてきかれた。そこにも此處にも灯が見えて、麥畑の此方の文化式の四角な窓の中には、卓を取巻いて旦那さんと細君と子供とが楽しさうに夕飯を取つてゐるのが、それと額縁の中の繪でも見るかのやうにはつきりと見えた。

九〇

そこに小さな足音がばたばたとしたと思ふと、もはや暗くなつた夜の空氣の中から、

『母アさんこんなところに來てゐたの?』

といふ聲がして、あたふたと急いで寄添つて來たのは志摩子だつた。喜久子もかね子もついて來た。驅けて來たと見えて皆な呼吸を切らしてゐた。

『何處に行つたかと思つて、あつちこつちさがしたのよ……。こんな所に來てゐるとは知らなかつたんですもの……。』

志摩子は安心はしたが、悲しさうな恨めしさうな聲で言つた。

『何方へ行つたの?』

お銀はもと來た路の方へと靜かに足を戻しながら言つた。

『向うの方へ行つちやつたワ……ねえ、喜ちゃんも知ってるね。ずつと向うよ』
全く方角の違つた方を志摩子は指さして、『何處に行つてもゐないんでせう。私、
何うしやうかと思つた……』

『本當よ、志摩子さん、泣きさうになつたのよ』

喜久子は年にも似合はないこまちやくれたことを言つた。

『馬鹿ねえ、お前……。待つてゐれば母さんは歸つて行くぢやないの？』

『だつて……母さんゐなくなつたら、何うしようと思つたんですもの……』急に
喜び變じて悲しみになつたといふやうに、志摩子は聲を立て、泣き出した。

『何だね？ お前……』

お銀は吃驚してそつちを見た。一度泣き出した上は、もはや容易に止められな
いといふやうに、志摩子は聲を長く引くやうにして、いかにも子供らしい泣きじ
やくりを續けた。『だつて……だつて、母さん、私、置いて行つて了つたんですも

の……何處に行つても母さんゐないんだもの……』その泣きじやくりは容易に止
まらうとはしなかつた。

『馬鹿な子ねえ、本當に……。母さんゐたから好いぢやないか？ そんなことを
泣くやつがあるもんですか』

『だつて……』向うの方をあんなにまでしてさがした。竹藪の向うの方まで行つ
た。其方で人聲がするので、それだらうと思つて行つて見ると、それは百姓が何か
してゐるのだつた。それから引きかへして此方へ來た。やつぱり影も形も見えな
かつた。母親は何處かに行つたに相違ない……。父親と一緒に志摩子を捨て、何處
かに行つたに相違ない……。それなのに、それなのに——。また思ひ出して悲しく
なつたといふやうに、今度は、『母さんの方が馬鹿よ。母さんの方が——』と言つ
て泣きつゞけた。『おん馬鹿さんねえ、本當に、お前は……。喜久子さんが見て笑
つてゐるぢやないか。母さんは、何處に行つたつて、お前を置いてきぼりになん

かしないから大丈夫だよ。家にじつとして待つてさへすれば好かつたんだよ』

『母さんの馬鹿!』

『母さんがゐなくなつては大變だと思つて一生懸命にさがしたんだ……。でも、ゐたから好いぢやないか。志摩子、もうそんなに泣くんぢやない』かう島田は言つたが、ふとその横のところを螢が一つふわふわと飛んで行くのに目をつけて、『あー・螢・螢!』と言つてそれを手で拂つた。幸ひそれは低かつた。

二度目に拂つた時には、うまく當つて、そのまゝ黄ろい麥島の傍の草の緑の上に落ちた、子供たちは皆なその側に向け寄つた。それで志摩子の涙も収まつた。お銀は手巾を出して、草の上から島田の掌の上に移つて、青白く光つてゐる螢をそのまゝその中に入れた。

九一

やはり二人してその郊外のお糸の家に行つた時だつた。その日は半日あそんでまだ日のある中にもどつて來た。停留場に来た時にも、まだ夕暮になつてはゐなかつた。

向う側の電車は頻繁にやつて來た。そしてその車臺は郊外から通勤してゐる人達で一杯に満たされてゐた。來る電車も來る電車も背廣に中折をかぶつたやうな人達を下して行つた。さういふ人達は皆な若い細君と二三人の可愛い子供たちとを持つてゐてそこにのみ楽しい一日の安息を求めて歸つて行くのだつた。島田とお銀とは此方側のプラットホームに立つて、初めは黙つてそれを見てゐたが、此方の電車が容易にやつて來ないので、後には退屈して、いろ／＼とさうした若い人たちのことに觸れて行つた。

『かうして見てゐると、僕等なんか丸で世間の埒外にほうり出されて了つてゐるやうな氣がするね……』

『私もさう思ふのよ。世の中は私達の向うの方にあるといふ氣がするのよ。あゝして皆あくせくして働いて歸つて來るのですからね……。さつきも私さう思つて見てゐたのよ。それはあゝいふ人たちはそれが幸福だなどとは決して思つてゐはしないでせうけれども、それはわかつてゐますけども、それでも何んな形でもあして世の中に雜り合つてゐるといふことは仕合せぢやないかなんて、今も今思つてゐたのよ……』

『本當にさうだね。氣が附いて見ると、いつかそこに放り出されてゐるといふわけなんだね……』

『さう思ふだけ年を取つたんですね』

『まア、さういふわけかな』

あまり深く墜ち過ぎた二人の心の世界だといふ氣がした。またあまりに遠く離れすぎた世間だといふ氣した。世間にはいろいろなことがある。戀愛も二人の

戀のやうにわるく停滯せずにもつと生々として動いてゐる。争ひといふ活動が却つてそのあたりの光景を美しくしてゐる。艱難が却つてその人達を幸福にしてゐる。片時も停まることなく世の中と人間とは動いてゐる。今日はすぐ昨日にならうとしてゐる。昨日はすぐ一昨日にならうとしてゐる。片時も留つてゐることはない——こんなことを思つてゐる間にまた向う側の電車がさういふ人たちを満載してそこに來てびたと留つた。

と、同時に待つてゐた此方側の電車もやつて來た。

幸ひにその電車は向う側の電車と違つてガラ明だつた。纔に七八人乗つてゐるぐらゐのものだつた。二人は乗らうとした時に、ひよいと派手な綺麗な色彩が目についたのを感じたが、其次の瞬間には、『まア……』だとか、『めづらしいわねえ』といふ美しい言葉がそこに互に連發される形となつた。あとから乗つた島田の眼には向うにゐる頃よく知つてゐた桃子の丸鬢姿が映つた。

桃子は島田を見ると、『まア……』と言つてそこから半ば立上らうとした。

『まア、まア』と島田はそれを制して、其前に立つたまゝ吊り革を持つて、『めづらしいところで逢ひましたね!』と言つて、じつとその姿に眼を注いだ。

『震災の時きりですね』お銀はその隣りが好い鹽梅に空いてゐるので、そこに腰を下しているいろとそれからのことを熱心に話し出した。

何でもその話できくと、桃子はとうに稼業をよして、その時分噂に立てられた金持の人と一緒になつて、何不足なく——と言ふよりは人が眼を睜るといふほどではないにしても兎に角全盛と言つても差支ないくらゐに幸福になつてゐるらしかつた。桃子は『妹がK驛を出たところに家を持つてゐますものですから、よく此の電車には乗るんですの……。まア本當に奇遇でしたこと……。』さも昔がなつかしいといふやうに、二人は頻りに美しい問投詞を取交した。

九二

桃子はずつと向うの川の方で大きな料理屋を開いてゐるやうな人だつた。その話は島田たちも以前にきいたことがあつた。川向うの大きな庭園。小さな部屋の澤山しきられてあるやうな家屋。『是非近い中に一度御一緒にいらしつて下さいまし』などと桃子は言つた。

桃子にしても、またそのK驛のそばにゐるといふ妹にしても、島田はよくその平生を知つてゐるのだつた。かれは桃子がやつと一本になつたばかりから知つてゐた。向うの土地でも、きりやうが好くをどりが巧みなので、いつももう一人の琴壽といふ藝者と袖をつらねて舞ふのが例だつた。しかしさういふ人たちも、かれ等の戀が古くなつて行くと同じやうに、次第に年を経て、皆なその出て行く方へと出て行くのだつた。それを思ふと、誰でも皆な大きな人生といふ流の中に絶

えず流されて行つてゐるやうなのを島田は感じた。

かの女と桃子の間には、いろいろな話が取換はされるのだつた。それは大抵はその土地の人達の噂で、あそこのお上さんは何うしたとか、あの姐さんは何うしたとかといふやうな話だつた。傍できいてゐる島田にもちよつとわからぬやうなことが多かつた。

車中の人たちは、皆なめづらしさうにして、その眼を此方へと送つた。ひとり
は中年を過ぎた粹なほつそりとした丸髷姿。ひとりは女ざかりと言つても好い、
何方かと言へば丈の高い艶やかな姿。二人とも指にはダイヤが二つも三つも光つ
て、新流行の更紗模様の帯を一方が緊めてゐると、一方は年だけにいくらか派手
な金紗を着て金色の模様の入つた丸帯などをしめてゐた。その帯には小さなブラ
チナの時計が挟まれてあるのが見えた。

いろいろな眼が此方を見たり、またいろいろな耳が此方に向けられてゐたりす

るにも拘らず、二人は平氣で盡きずに美しい聲の音楽を取換はした。

二停留場ほど来たところで、桃子の隣の席が明いたので、向う側に腰をかけて
ゐた島田はそのまゝこつちへと席を移した。續いて島田と桃子との間にも話が始
まつた。今日訪ねて行くK驛の近くにゐる妹は、子供があつたりしたけれども、
もとの旦那からは離れて、今ではかねてから深い中であつた人と一緒に幸福に暮
してゐるなどと桃子は話した。『Kの停車場を下りると、すぐなもんですから、一
日おきのやうに出かけてまゐりますの……。この電車なら、それはわけはありま
せんから……。』島田にはさうした言葉の中にも人生の移り變つて行くさまがはつ
きり手に取つて見えるやうな氣がした。

その郊外電車は途中で乗り換へなければならなかつた。かれ等は一度その終端
驛で下りて、大勢の人たちと一緒に改札口を通つて、それから長い陸橋を下に降
りて行かなければならなかつた。そこで二人はまたベンチに腰を下して盡きない

話をつゞけた。幸ひにその幹線の電車は今行つたばかりだつた。あとは容易にやつて來なかつた。

もはや島田はその二人の話には雜らなかつた。かれは靜かにステッキを持つたまゝ、その乗客の少いプラットホームを往つたり來つたりした。かれは今日そのお糸の郊外の宅で、新たに家をつくる話など、お銀から持ち出されたことを思ひ出した。そしてその話はかなりかれの興味を誘つた。かれはそこに誰も知らないかれ等の巢を新たにつくつて見たいやうな氣がした。お銀は言つた。『金は私だつて少しは持つてゐますからね……。新ちやんに監督して貰へば、出來ないことはありませんね。それにさうときまれば、母さんだつて黙つて見てやしませんからね』などと言つたことを思ひ出した。

九三

『私はどつちかと言ふと、田舎には入りたくないんです……。』お銀の母親はこんな風にして話した。震災で此處に引込んで來たのでさへ困つてゐるのに、此上さういふ郊外に入つて行くのは、今はたとへ電車が出來て便利だと言つても餘り思はしくないといふのだつた。

『何しろ、此處でさへ、新しい魚では困つてゐるんだから……。』

『さうねえ、魚はないねえ！』

傍からお銀が言つた。

『年を取つて、せめておさかなでも好いのがたべられる方へ出て行かうといふのなら好いけれども、あべこべに奥へ入つて行くのではねえ！』

芋、牛蒡が大きらひなのに、それしかないところへわざわざ入つて行くのは悲しいといふのであつた。母親は日本橋の真中で育つて、鰻は神田川、鮎は蛇の目、鯰のすつぽん煮などはわざわざ山谷の重箱から取寄せたなどといふ話をした。菓

子だつて、虎屋や鹽瀬あたりのものでなければ食はなかつた。それは今になつては、そんなことを言つて、昔が好いなどと言つてゐるのではないけれども——時のうつり替りにつれて何うにでもなつて行かなければならないけども、それでも一歩でも田舎に入つて行くのは悲しいといふ語氣だつた。

『でも、おつかさん。東京の市中では、地面なんかありはしませんしね。それに、借りるに高いことを言つてゐますからね。市中ではとても私たちが家を建てるやうな餘裕はありませんよ』

『それはさうだね』

『今ぢや、わざわざ金持が郊外の静かなところに家を建て、店には毎日電車を通つて行くといふ時代になつたんですからね。おつ母さんのやうに考へずに、何でも食べたいものがあつたら、電車で市中に食べに行くのよ』

お銀にしては、家を建てるなら、今でなければもう建てる機會はないぐらゐに

ひどく乘氣になつてゐるのだつた。お銀は長い間それを口にしたことをそこに持ち出した。

『先生だつて、昔から、さういふ時機が來たら、家ぐらゐ建て、やるつて仰有つてゐるんですもの……。あんな話をしてから、もうずるぶん經つんですもの……。』
お互ひに心のさぐり合ひを物質に持つて行つてしてゐる時分言つたやうなことをお銀はそこに持ち出したりした。

『さうだね……。これで、さうした家が出來れば、兎に角、うそをつかなかつたことになるからね。出來れば出來る方が賛成だね！』

傍でそれをきいてゐた鳥田は莞爾えんじやく笑ひながら言つた。

母親とて全然不賛成と言ふのでもなかつた。

『それでは、私もそこに行つて見ませう……。』こんなことを言つて母親はそのお糸の家へと出かけて行つた。

歸つて來てからも、母親は容易にその説を改めなかつた。『夜は男きれがなくつては、さびしいやうなところだね。私にはまだ決心はつきかねるよ。……それにあんなどころでは折角建てゝも、住むに倦きて賣らうとでもいふ時に、半分値にしか賣れやしないからね』

『あの地面も見て來た？』

『お糸が伴れて行つて呉れたよ』

『でも、お糸の家が近くつて、往つたり來つたりが出来て、好いぢやないの……』

『それはさうだけでも……』母親は猶も煮え切らずに、お糸にも頻りに勧められた話などをした。

九四

たうとうこんなところにまで來て了つたことを島田はくり返した。『ぢや家を建

てて下さいな……。ね、ね。先生なんか、そんなことわけがないぢやないの……』女が男に對する要求のひとつとしてお銀も言ひ、お銀の母親も言つたのは今から十年も前のことだつた。お銀にその大きな體をした情人のある頃だつた。その時島田は馬鹿にしてゐるとも思ひ、随分蟲の好い話だとも思ひ、またその一方ではわざとさういふ大きなことを吹きかけて切れようとする前提ではないかといふやうにも邪推し、もう少し内面的に考へて、こつちの心の深い淺いを探るための言葉とも思ひ、『よし、よし、それぢやそれを五年計畫でやらう。俺だつて金なんかありやしないからね。それまでお前のためにせつせと働くこととしよう。五年経てば金もたまるし、お前と俺との仲だつてもつとしつかりしたものになるだらうからね……』などと、半ば冗談のやうに言つたものだつたが——それをまたお銀は、『先生はすぐあゝ言つて遁げを張るんですからね、だから何を言つてゐるんだかわからないといふ氣がするのよ……。先生ぐらゐ引込み思案の人はないわね。ほ

んたうに石橋を叩いて、これなら大丈夫だと思つてから、それをそろそろとわたるやうな人ね……」などと言つたものだつたが、それから数年経つた後には、そんな話はもう爪の垢ほども二人の間には出なくなつて、かへつて家なんかつくることの不経済なことなどを互に言ふやうになつたのであつた。言ひ換へればかれ等の間には、もはやさうした心のさぐり合ひをする必要がなくなつて了つたのであつた。ことに、最近になつては、そんな話をりをり出るには出ても、『さうね、却つて家なんか持つては厄介ね。それよりも好きのところを借りて住んでゐる方が好いのよ。その方が自由よ……』などとお銀の方から打消して了ふのであつた。それでも震災の後にたつた一度かういふことがあつた。向うに戻つて行くにしても、何んなバラツクでも拵へなければあたりに対してきまりがわるいと言つて、かねて知つてゐる見番の人に頼んで、もとゐたところの場所から五六間離れたところに、三間ぐゐの家をたてることを計畫したが、その時には別に島田に

はそれを助けてくれとも何とも言はず、お銀とお銀の母親とだけで相談して、その結果をあとで話すぐらゐな程度であつたがそれでも島田はいざとなつたらその費用の半分ぐらゐはだまつて出してやるつもりに決心してゐた。ところがそのバラツクが半分出来かけてから、それが氣に入らず、急に元の土地にもどつて行くことがいやになつて、その家屋は、他に譲つて了ふことになつて了つたのであつた。『だつて、いやな家なんですもの……。……あんな家に入つて、またもとの奎阿彌になつて了ふのかと思ふと、つくづくいやになつて了つたんですもの……。……もういやよ、あの稼業は……。あの中の空氣ぐらゐ薄情なものはありませんからね。そんなことしなくたつて、もう好いでもものね』お銀はさういふ風にその計畫をやめた後に話すのだつた。そしてその以後は家を建てる話などは、かれ等の口からは餘り出て來なかつたのである。たまたま母親が冗談半分に、『五年計畫が十年になつて了ひましたねえ！』などと言ふぐらゐなものだつたのである。しかし

島田にしては、それを全くやめにして了つたといふのではなかつた。女のために戀の金屋を築くといふことは、少くとも男としての喜ばしい爲事のひとつであらねばならなかつた。かれはその身が貧しいがために、さうした喜びに浸ることの出来ないのを常に惜しみ且つ悲しんだ。

九五

『たうとうさういふ時期が来たわけかね……』

『あそこなら、お糸のところは近いし、行つたり來たりするのも便利だし……』
母親はあまり望んではゐないけれども、それは何うにでもなるといふやうなお銀の口振りだつた。

いよいよ島田はそつちの方に心を向けることになつた。かれはお銀と一緒にまたその郊外の方へと出かけて行つた。

かれ等は此前夕暮の追想に耽つたところから、もう少し右に寄つたあたりの地面を物色した。別にさう大して好いところとも思へなかつたけれども、その林を傍に控へたところをそれとよめてそれを持つてゐる地主の家に出かけて行つた。

周囲を竹藪で囲まれたやうな草葺の家では、地主の鼻らしい五十近い中婆が、目を睨るやうにしてお銀の艶やかな姿を見上げた。爺がゐないので、さうはつきりとしたことはわからなかつたが、それでも地代のことだの、年限のことだの、村のつき合のことだのかなり細かいことを話した。その空地はつい此間まで竹藪であつたのを、あたりがひらけて來るので去年そこを開いたばかりだなどとも言つた。『え、え、さむしいことなんかありませんとも……。村では何年と泥棒の話なんかきいたことはないんですから……。それに御不自由には御不自由でも、かうして開けて來ますと、ぢきいろいろなものが出來ますから、向うの通りにもいろいろなものが出來ました……』丁寧な言葉の中にをりをりこの郊外の百姓たちの

遣ふアクセントを雜せて鼻は頻りに村の好いことや静かなことやわるいものゝ住んでゐないことなどを話した。二人の眼には郊外の農家らしい、ひろくとした臺所が向うに見えた。

娘らしい十八九の肥つた女が、やつぱりお銀の美しさに眼を睜りながら、そこに丁寧にお時儀をして茶を運んで來た。

そこを出て此方に來ながら、

『好きさうなお上さんね』

『うむ……』

『あそこなら、好くはないかと思ふわ。向うには家がたてられるおそれはなし、南向にすれば冬なんか暖くつて好いと思ふわ』

『さうだね……』

『きめたつてもう好いぢやありませんか……。おつ母さんなんかいくら二の足を

踏んだつて、やつて了へば、何うにでもなるぢやないの……。お金のことなら、私、出して置いても好いわ』

『うむ、まあ、その方はその方として、さむしいな……。少し……。』

『そんなことを言つてゐたら、いつまで経つたつてダメよ』

で、かれ等はゆるやかな足どりで歩いた。またしても島田の頭にはその家を建てることを約束した時分のことや浮んで來た。よくもこゝまで來たものだと思つた。何の彼のと言つて、かれはひとつひとつその約束を實行して來てゐる譯になつてゐることを追想した。そしてその約束を遂行したといふことが——世間ではこれを單なる物質といふやうに考へて了ふのが例になつてゐるが、實はそれがお互ひの心を合はせる上に本質的に役立つてゐるといふことを島田は深く考へた。やつぱりお互ひに生命を托するところまで行かなければ戀愛は何うにもならないものだといふことがかれの頭の中を往來した。かれ等は徐かにお糸の家のある方へ

ともどつて来た。そこでは喜久子がもう學校からもどつて来てゐて、にこにこした色白の顔をあたりに見せて丁寧におじぎをしたりなどした。

九六

その初冬の頃には、たうとうそこに工事が始まつて、むねあげの日には、志摩子を伴れたお銀と島田とお糸との姿が並んでそこらに立つてゐるのが見られた。大工さんたちは土地の土方たちと一緒になつて頻に木材と木材とを組合せたり、土臺の下に石を打ち込んだりしてゐたが、午後四時すぎには、それもあら方終つて、例の白い紙のひらひらしたものを尖頭につけたものがそのむねの中心にたてられた。つゞいて蕎麥や酒が出た。お銀はやらなくても好い祝儀を出して皆なを喜ばせた。

『大變なものね……。家を建てるつていふことは？』

『うむ』

『でも、こゝなら、向うに家を建てられる心配はないからいゝわね』

お糸が傍から言つた。

『まア、あの林が林で残されてゐる中はね……。』

島田は今から二十年も前に郊外に家を建てた經驗を持つてゐるので——とてもその邊までは開けて来る心配はないと思つてゐたのに、十年もたゝぬのにそのあたりがすつかり屋敷町になつて了つたことを知つてゐるので、此處等もさう長い間このまゝで残されてゐると思へなかつた。かれは一種の感慨に打たれた。またかうして郊外に建てられるむねあげの家を見に来ようとは思つてゐなかつた。

お銀は機嫌がよかつた。お銀の母親も初めの中は、年を取つたものの習ひとして、いろいろな方面から利害を考へて、容易に賛成はしなかつたけれども、いよいよそれにきまつてからは、やつぱりうれしさうで、『たうとう、私たちの家が出来』

るのね』と言つて喜びの色を満面にたゝへた。島田に向つても、『先生、お禮を申しあげます……。先生がうそをおつしやつたことのないのはよく知つてゐますけれども、たうとう十年計畫を本當になすつて下すつたことをお禮申し上げます……。』と言つて丁寧にお時儀をした。

父親はことに嬉しさうだつた。かれは何遍となく、そこへ出かけて行つた。勿論、父親はその建築の監督をしたりすることの出来るやうな人ではなかつた。六十年を無爲で通して來たやうな人だつた。それだけ一層喜ばしいらしかつた。

『また、今日、おぢいさん、仕事場に行つたんですよ……。餘程うれしいのね。もう大分物々しくなつて來たさうですよ』などとお銀は言つた。

それは道理だつた。かれ等は祖先から傳はつて來た茅場町の店を人手にわたしてから、全く世間のあら波に漂はされ通してやつて來た。たゞわづかに虎の子のやうにして持つて來た少しばかりの銀行の通帳と、娘の三味線とにたよるやうに

してやつて來た。恐らく島田といふものがゐなかつたならば——それはそれ相應に保護して呉れるものが出來ては來たであらうけれども、しかも島田なしには、かういふ風に世間から後指も指されずに、もとゐたところの人たちからもわるく言はれずに、一本すぢに、こゝまで通つて來ることは出來なかつたに相違なかつた。そこを母親は感謝するのだつた。

島田にしては、兎に角どんな小さなものでも、そこにかれ等を住まはせるための家屋を一軒建てたといふことに満足を感じた。その満足のためにはその身の骨折りなどは問ふに足りないほど小さなもののやうな氣がした。かれはひまがあるとひとりでも出かけた。

九七

室の間取についていろいろ相談したことなどがくり返された。これは今度ばか

りではなかつた。家を建てる時にはいつもきまつてさうした話が出た。震災後に向うにバラックを建てようとした時にも、お銀は新吾を頼んで圖を引いて貰つて、それを小石川の方位見に見て貰ひに行つたりした。そしてその時にはいつもかれとかの女との室がその話の中心になつた。『だつて此處ぢや一寸不便ぢやないの……』とか、『こゝにその六疊をつくと、いやに通りに近くなるぢやないの？』とか言つた。厨からその室に行くにも餘り不便ではないやうにしたいなどと言つた。然しあまりにその室だけに重きを置くといふことは、島田に變な氣を起させた。いくら金を出して自分がつくるのだと言つても、あまりに我まゝに過ぎるやうな氣がした。またあまりに露骨に二人の痴情を他に肯定させすぎるやうな氣がした。戀といふことは祕密が面白いものであるのに——誰にもわからずにこつそりするのが一番楽しいものであるのにさういふ風にいろいろな人に肯定されて、それが二人の室といふ風にきめられて、半ば公けにされたやうな形になるのは何

となく氣がひけた。お銀の父母の存在をすら無視するやうな形になることが氣に懸つた。さう言ふと、お銀は、『だつたつてそんなこと構はないわ……おつかさんだつて、そんなこと何とも思つてゐやしませんよ』と平氣で言つた。否、そればかりではなかつた。震災後にバラックを向うに建てようとした時には、その家の圖面を見番の幹事をしてゐる人に引いて貰つたので、その二人の室といふものに就いてわるくひやかされたといふ話などをお銀は笑ひながら話した。

『そんなこと構ひはしないわ』

『でもね……』

『おつかさんなんか、それどころぢやないわ。非常によろこんでゐるんですもの……。表面では賛成しないやうなことを言つてゐたけども、あまり勝手なことを言つてはわるいと思つて遠慮してたのね……』

『さうかしら……』

『親の身になると、かう思ふのね。もうこれだけお世話になつてゐるのに、この上家なんかつくつて貰つては、あまりに蟲が好すぎて愛想をつかされると大變だつていふ風に考へてるのよ。お前は先生に愛想でもつかされたら何うするんだつて言ふのよ。それから私、言つてやつたわ。爲方がないわ、愛想をつかされば、その時は他に考へがあるから好いッて言つてやつたわ。ね、先生、私だつてひとつの存在よ。何うにだつてして食つて行くわよ』

『わるく僕の眞似をするね』

(私だつてひとつの存在よ)が島田には可笑しかつたのであつた。

二人の室の前のところには庭をつくつて、いろいろなものを栽ふようなどと言つた。草花の壇もこしらへやうし、出来たら小さな池も掘りたいものだなどと言つた。床の間の柱にする材を、ある日はお銀と二人で出かけて行つて見たりなどした。カリンだのけやきだのいろいろなものを見た後で、少し高かつたけれども

黒檀の立派なやつを買つた。

それは四間ばかりの小さな家屋の設計だ。大したことではない。しかし出来るだけ好いものをつかつて、米材などは成りたけ用ゐないやうにした。戀の金屋としてはあまりに粗末なものではあつたけれども、それでも二つの心を満足させるやうには造りたいものだと思つた。

九八

島田も度々出かけて行つた。従つて今から二十年も前にやつぱり今のやうにして家屋を郊外に構へた時のことが繰返された。『何うも市中の借家はいかん。それに子供のためにもよくない……』かう言つて妻の里の兄に當る人から金を融通して貰つて、芝をつくつてゐる畠を潰してそこに今の家屋を建てた。一面かれはそこで爲事をしようとした。今までのやうな囚はれた生活でなしに、もつと眞面目

な生活をしようとした。戀などといふよりもつと自分の本當のことをしようとした。かれは靜かに勉強することの出来る書齋の出来ることを喜んだ。かれは外國の詩人生活——市から數里隔つた處に住んで傍目も觸らずに大作に従事したいふ詩人の生活をそこに再現し得ることを喜んだ。子供は子供で新しい空氣を得るであらう。妻は妻で煩はしい虚禮の生活から免かれて來ることが出来るであらう。かう言ふ風に眞面目に考へて、その家屋の日に日に出來て行くのを何とも言へない望み多い心で見に出かけて行つたことを思ひ出すことが出來た。

やつぱり今の場所と同じやうな場所だつた。林が一方に疎らに連なつてゐて、草藪が風にカサカサしてゐた。大工の削る鉋屑などがあちこちに散らばつて行つた。かれは今だに、その一方に小さな小屋掛をして大工が二三人寢とまりして自炊してゐたさまを歷々と眼に浮べることが出來た。夜はかれ等は町に出て酒を飲んだりするので、一番年下の大工が留守番としてそこに残された。夜深く酒に酔

つて流行唄などをうたふ聲が何處かできこえた。

希望の多い烏田の生活だつた。心も體もすべて生々してゐた。ひとつの草花に對してすらかれの心は動いた。かれは今建てつゝある家屋に對して、その間にいかにこの人生が流れて行つたかをありありと思ひ浮べた。感慨無量だつた。かれはかれの姿を、時に或は沈み時に或は浮び、また時には漂よひつゝ、いつの間にかその長い年月を此處までやつて來たことを考へずにはゐられなかつた。またかれの家庭にしても、その時分は幼なかつたものが皆な大きくなつて、てんでに他に嫁して行つたり獨立したりするやうな時期に到達してゐることを思つた。やつぱり何うにもならないことだつた。妻は妻、子は子、自分は自分だつた。縁があつて互に結びついて來たけれども——お互に固く結びついて來る必要がある中は結びついて來たけれども、それを貫く紐がゆるくなるにつれて、皆てんでんばらばらになつて行くのだつた。そしてその向うには何があるだらう？ 空虚と死と

があるばかりではなかつたか。

それを考へると、島田は默然とした。今だに戀にあこがれたりなどしてゐるかを馬鹿々々しく感じた。何故かれもさうした境から出て來ないのか。さうした境から出て、もつと静かな境に入らないのか。かれは一度入りかけてそしてまた出て來たその静かな境を回顧した。芭蕉や西行などのことを念頭に浮べた。

しかしさうした境まで入りかけて、またそこから出て來た時のことがはつきりと頭に浮んで來た。その境に安んずるには、かれはまだあまりに若かつた。もう少し経つてからでも遅くはないやうな氣がした。

九九

島田は佗しい佗しい氣になることが、往々にしてあつた。それはだしぬけに來た。何んなに得意な時にも、また何んなに喜悅に滿されてゐる時にも……。さう

いふ時にはかれはいつも深い沈黙に墜ちた。丸でその身があらゆるものから、あらゆる自然から無限に壓迫されるやうな、脅迫觀念とでも言はなければとても形容することの出來ないやうな一種の恐怖——さういふものが重苦しく彼を支配した。

それは細かい、細かい、とても人間の五感ではわからないやうなそれから先にはとても入つて行くことが出來ないやうな、それでゐて銀の線のやうなものがそれからそれへと顛へるやうに動いて、關係のないやうなところに深い眼に見えない關係があり、全く異なつた別なものに何等かの連續があるやうなものだつた。何でも言はないものはないお銀に對してすら、それだけは説明することは出來なかつた。

ある時お銀は言つた。

『私ね、あなたのことは何でも知らないものはないと思ふんだけど、たつた一

つ不思議に思ふことがあるのよ……』

『ふむ？』

『あなたはよく急にだまり込んで了ふことがあるわね。その時は私が何を言つても返事をしないわね、あれは何うしたの？』

『俺にもわからない……』

『しかし、だまつておしまひになるといふことはわかるんでせう？』

『それはわかるがね……』

『私、それだけが心配なの……。何か大きな秘密でもあるんぢやないかと昔からよくさう思つたわ。しかし、秘密などあるのではないといふことは、それは今でもわかつてゐるのだけれども、それでも變ね。あのだまり込んで了ふ時は何んな氣持がするんでせうね？』

『俺にもわからない……。やつぱり遺傳とでも言ふより外しやうがないのかも知

れないな……』

『あれだけはわるい癖だと思ふわ。何か心配ごとでもあるやうに、私までじつと引込まれて行くやうな氣がするんですもの……』

またある時は、お銀はそれに一步を突込んだといふやうにして言つた。

『やつぱりさうなのね？』

『……』

『奥さんや子供のことね……。それがそこにくつついてゐるのね。その證據にはこのごろ奥さんや子供のことは、これつばかしも私に言つて下さいませんものね。それは嫉妬ぢやないんですよ。もつともつとさきのことよ。わかる？』

『わからないことはない……』

『あなた御自分ではさう思つてゐないに違ひないけれども、それは分るけれども、やつぱりそれについて行つてゐるのではないかと思ふの……』

『それはさうだらうな……』

『だから、やつぱり心と言つても表面の心ではない。もつと底の底の心がつゞいてゐるんだと思ふの……。そしてそれがいろいろな微妙なはたらきをしてゐるんぢやないかと思ふの……。』

『さうだらうな』

『だと、何うすることも出来ないわね』

『本當だ……。やつぱり見えないものが積み重ねられて行つてゐるらしいな……。しかし、これは何うにもならない……。自分にも他にもわからないんだから……。』

100

全く別なものが暗々裏に續いて行つてゐるといふ心理、そこに到つてかれはいつも突當つて了ふのだつた。それが何ういふわけであるかと考へて見てもその答

は竟に竟にやつて來なかつた。島田は曾て、その心持が宗教的になつて行つた時のことを考へた。その時にはかれはその見えない糸——否、その全く別なものが暗々裡に互ひに影響し合ふといふやうな境にまでその五官を働かせて行つて、そこに神秘的サイコロジカルな境を發見したやうに思つた。要するに人間はそこまですつて行かなければいけないと思つた。しかしかれは長い間その心の境に満足してゐられなかつた。かれはすぐそこからもどつて來た。他に言はせれば、或はそれは一つの退轉であつて、さういふ風に考へることは好いことではないといふやうに言はれるかも知れないが、しかし自分で満足することが出來ないのだから爲方がなかつた。かれは見えない糸のもつれと言つたやうなものを一つ一つたどつて行けば、到底それに解け難い結び目があつて、何うにもならないものであることをその體驗で知つてゐるのだつた。要するに感覺の世界は不可思議だつた。何が何に影響し、またその影響が他に何う影響するかといふことは到底不可知で

あつた。かれはそこに行くといつも黙つた。

お銀にしても、やつぱりそれを持って餘してゐるのだつた。かの女もひとりである時には、いつもその深い不可解の扉に打突るらしかつた。『何うしてかうわけがわからなくなるんでせうね……。私は昨日も一日誰とも口もきかずに暮して了つた……。何か自分の外に自分の影のやうなものがあつて、それがいろいろなことをするやうな氣がするんですがね……。何うしてでせうね……。？』さうはきつぱりと言つて了はないまでも、島田の妻のことが常に氣にかゝつてゐるのであるといふことは島田にもそれとわかつた。

これが島田の妻が普通の妻のやうに、ひどいやきもちでもやくのならば——おもてにあらはれて何等かの形を示すのならば、それならかへつてさうした思ひに悩まされるやうなこともなかつたであらうが、相手がさうしたことに全く頓着せず、しづかにじつとしてゐて、この三つの關係が少しも不思議もないやうにつゞ

いてゐるので、それで一層氣に懸るらしかつた。新しい家屋の建築を始めてから、お銀はよくそれを持出した。

『まア、好いよ、そんなこと……。』

『でも……。』

『お前はよつぽど神経家だね？』

『だつて、さういふことがいつでも考へられるんですもの……。』

『まア、好い加減にして置く方が好い……。』

『昨日も一日そんなことを考へてゐたんですよ』

『それよりも家の方に行つて見たら何うだ？ もう餘程出來た筈だ！』

『さうも思ふんですけどもね……。何だか氣になつてしやうがないんです……。私ばかり勝手なことをして、本當にすまないやうな氣がするんですもの……。』

『だから、神経家だつて言ふんだよ。俺がやつてゐることだ！ 何もそんなこと

を氣にする必要はない……』

『それはさうでせうけど……』

やつぱりそれは感覺のことで何うにもならないことなのだつた。壁だつた。無言であるだけ、それだけつらい壁だつた。

101

それでも郊外の小さな家屋は次第にその形を成して行つた。湯殿も勝手も玄關も皆な小ぢんまりとした形でその存在を示して來た。六疊の茶の間は南を受けて冬は暖かさうであつた。庭も拵へようと思へば、いくらでも廣くすることが出來た。せつかちにも父親は百合の根などを買つて來て、そこに栽ゑた。

お糸と新吾とは時々それを見舞つて、こんな話をした。

『家をつくと好いわね』

『それは好いにきまつてゐるサ……』

『私たちが家を拵へるなんて、一生あるかしら？』

『變なことを言ふね……。俺だつて、さういふ運が向いて來ないとは限らないよ』

お糸はわざとからかふやうに、

『さうですかね？ 向いて來ますかね』

『馬鹿にするなよ……。今ではこんなちぢこもつてゐても、今にお前なんか自用の自動車にでも何でもものせてやらア。家だつて、もつと大きな家をつくつてやらア……』

『さう、さういふ自信があるの？ それなら結構ね……』

わるく廻して言ふので、

『この頃は、お前、わるく喰つてかゝるね……。もとはいつも従順な好い細君だつたのに……』

『だつて、さういつまでも好い奥さんばかりでゐられやしないもの……』

『つまりもう少し榮華がしたいといふわけなんだな……。たうとう女の本性をあらはして來たのだな……？』

『それはさうよ。もう何年になると思つて？』

『何が？』

『結婚してから、もう十年になるぢやないの……』

『もうよせ、よせ！』

こんなことを言つても二人は別に争つてゐるのでも何でもなかつた。ぢきぢきは調子をもとにもどして、

『私もおさんに頼んで、この向うのところこゝろに小さな家で好いから拵へて貰はうかしら？』

『拵へて呉れるもんか？』

『ぢや、ねえさんに拵へて貰ふから好いわ……』

『お前は餘程馬鹿だよ』

『馬鹿でも好いわ』

こんなことを言ひながら、大工の忙いそはしげに縁側の板を張つてゐるあたりを竝んでブラブラ歩いた。お糸たちには島田とお銀の戀愛状態がまだはつきりとはわかつてゐなかつた。たまにはそれに觸れたやうな話をすることはあつても、本當のことは言へないらしかつた。お糸の方はそれでも幼いころからいろいろなことを知つてゐるので、ある程度までそれがわかつてゐるが、新吾の方には男だけにいくらか常に傍觀してゐるといふやうな形が雜つてゐた。

『あなたはさう言ふけれども、ねえさんはもつと深く思つてゐるらしいのね……。やつぱり、初めからさういやだとは思つてゐなかつたのね』こんな風にお糸は話した。